

<日本の真相 3>

学研ムー（2009年版）の7月号と10月号に興味深い記事が掲載されていた。

- ・7月号：封印された物部神道 秦の始皇帝とユダヤの秘儀。
- ・9月号：日本の古墳はピラミッドだった！

7月号は飛鳥昭雄氏が八咫鳥から直接聞いた話を基にしており、籠神社宮司の談話を交えながら、物部氏の正体について言及している。9月号は飛鳥氏の著ではなく、有賀訓氏の著であるが、謎の多い忌部氏について言及されていた。これらは謎が多い物部氏について知るための極めて重要な資料なので、これらを基に、物部氏について考察する。

1：物部氏の真相

(1) 今までのまとめ

<日本の真相 1><日本の真相 2>では秦氏と物部氏について記したが、それをまとめる。

- ・基本的に秦氏は失われていない二氏族（ユダ、ベニヤミン）の原始キリスト教徒で、物部氏は失われた十支族のユダヤ教徒である。
- ・二氏族と十支族という分け方ではなく、原始キリスト教とユダヤ教という分け方で言えば、原始キリスト教徒が秦氏、ユダヤ教徒が物部氏である。また、原始キリスト教に改宗した物部氏は秦氏となった。
- ・物部氏は最終的に原始キリスト教に改宗し、天皇を中心とした日本国が成立した。
- ・秦氏と物部氏の区別は上述の通りであるが、例えば秦氏と共に渡来したガド族の大王フルは九州物部王朝に婿入りしたが、改宗して秦氏の大王たる応神＝神武天皇となった。この場合、フルは十支族系故に、また物部氏に婿入りしたので物部氏であるが、歴史的な扱いとしては秦氏の大王たる応神天皇ということになる。つまり、秦氏渡来以前（＝イエス誕生以前）に日本の国土に渡来していたイスラエルの支族が物部氏である。
- ・物部氏のトップ＝王族は尾張氏（熱田神宮）＝海部氏（籠神社）であり、エフライム族である。それは、尾張氏が族長の印たるアロンの杖＝草薙神剣を保有することが証である。アロンの杖は、失われた十支族の中の王族たるエフライム族が保有していたからである。また、フルが九州物部王朝に婿入りした証として持ってきたマナの壺は、尾張氏と同族である海部氏の手に入り、勾玉の原型となった。

- ・ 籠神社の海部宮司に依ると、古代の日本で最大勢力を誇っていたのは尾張氏＝海部氏であり、最後まで秦氏に抵抗した。彼らの拠点は近畿を中心とした広い範囲であったが、秦氏に権力を移譲した後、尾張氏は美濃を通過して現在の尾張地方に辿り着いた。(海部宮司から直接教えて頂いた。)

(2) 秦の始皇帝と徐福

飛鳥氏は再び八咫鳥と面会し、物部氏の真相について聞き出した。それは、“物部氏は徐福と共に来た”ということである！伝説として、徐福は秦の始皇帝に命じられ、不老不死の妙薬を求め、東の海の国に向かったとされている。支那の地から見て東の海の国というのは、日本に他ならない。そして、日本各地には徐福渡来の伝説が残されており、富士山が不老不死の国にあると言われていた蓬莱山であるなど、枚挙にいとまが無い。そのため、徐福伝説はかなり信憑性が高いと考えている人たちがいるが、今回の八咫鳥に依る衝撃的告白により、徐福の渡来は真実であるということが判明したのである。

さて、飛鳥氏は秦の始皇帝がペルシャ系ユダヤ人だったと述べている。その根拠は、次の通りである。

- ・ 始皇帝の墓からペルシャ系の人骨が発見された。
- ・ 秦と同じ支配体制を持った国がかつて存在し、それはアケメネス朝ペルシャである。アケメネス朝ペルシャの勢力はエジプトからインドまで及んだ広範囲であり、支那の最も西に位置していた秦は大きな影響を受けている。
- ・ ユダヤ人はバビロン捕囚で囚われたが、そのバビロニア王国を打倒してユダヤ人を解放したのは、アケメネス朝ペルシャである。
- ・ 後に始皇帝となる政（せい）を見出したのは、宰相にまで昇り詰めた呂不韋（りよふい）である。呂不韋は一商人に過ぎなかったが、莊襄王に取り入り、自らの愛人だった趙姫を愛妾として差し出し、政治の中核へと食い込んだ。王亡き後、幼い始皇帝をバックアップし、絶大な権力を手にした。そのため、司馬遷の歴史書「史記」には、呂不韋が始皇帝の実父であると記されている。呂不韋が商人ならば、シルクロードでの交易はユダヤ人が担ってきたので、ユダヤ人の可能性がある。そして、呂不韋という読みは“レビ”に繋がる。また、始皇帝の容貌や性格について、「史記」には“鼻が高く、目は切れ長で”とあり、鉤鼻の青目という伝説もあり、ユダヤ人の容貌である。
- ・ 秦は元々支那の西域にあり、当然のことながら、ユダヤ商人が活発に往き来していた。“秦”とは“柵外の人”という意味だけではなく、古代ローマ帝国を含む西域を指していた。「支那」という名称は、王朝名の「秦」が西方に伝わって変化したものとされている。

確かに、このような論点からすれば、始皇帝がペルシャ系ユダヤ人である、

という説も支持できよう。西域の秦の建国は、周の孝王が大丘にいた非子に牧畜をさせ、秦の地を与え、嬴（エイ）氏を名乗らせたことが始まりである。襄公は周の内乱に際して平王を助けたので初めて諸侯に任じ、岐山以西の地を与えて「秦公」とした。この時に犠牲を用いて上帝を祀ったが、これは西戎の習俗に由来する。（以上、Wikipedia より。）犠牲を用いるのは、ユダヤの習俗に他ならない。

それに、何と言っても日本に於けるカッパーラは支那の道教を基本としており、支那の地域に陰陽道の使い手がいたことは確実である。陰陽道の使い手とは、すなわち、ユダヤ神秘主義カッパーラの使い手に他ならない。

また、始皇帝は度量衡、貨幣、車の幅を統一し、それまで地方ごとに異なる字体が使用されていた漢字を改め、秦の字体を標準字体として採用した。漢字はカッパーラであり、秦氏の創作であるから、秦氏の祖先と始皇帝との関係が伺える。それに、始皇帝は万里の長城のような大土木事業を行っているが、平安京建設など、土木事業は秦氏の得意とするところであり、ここからも秦氏の祖先と始皇帝との関係が伺える。

他にも、法隆寺は世界最古の木造建築であり、イエスがモデルとなっている聖徳太子縁の寺である。この寺を建築したのは勿論秦氏であるが、建築に携わった者の名が残されており、彼らの名は支那語やヒンズー語では意味を成さず、ペルシャ語なら意味を成す名であるという。

詳細については更なる議論が必要であろうが、ここでは、秦の始皇帝がペルシャ系ユダヤ人だったという説を妥当性のある説として採用しても問題無いと考える。では、徐福については、どのような伝承があるのか。

“始皇帝は幼少より虚弱な体質であったため、中国統一の頃から不老不死を求めて方士（神仙術の使い手）を重用するようになった。2度目の巡幸で始皇帝は斉に滞在し、徐福に対して東方にあるという蓬莱国に向い、仙人を連れて来るよう命じた。”

実は、徐福も始皇帝と同族である。伝説の黄帝に繋がる大費（伯翳、ハクエイ）が舜帝の時代に禹の治水工事に協力し、舜帝から黒い軍旗と嬴姓を賜った。始皇帝は、その伯翳の血統である。一方の徐福は「史記」に依ると、斉の国、琅邪（ろうや）の人と記されているが、最近の調査で、その系図は伯翳に至ることが判明した。つまり、始皇帝も徐福も、姓は“嬴”で同族なのである。この“嬴”という姓は注目すべきで、古代支那の奇書「山海経（せんがいきょう）」に依ると、嬴の民は鳥の足を持っていたという。しかも、始皇帝の血統である伯翳が黒い軍旗を賜っていた。つまり、“黒い鳥”ということなり、これは鳥である。日本で一切を取り仕切ってきたのは“八咫鳥”である。

さて、徐福は神仙術に長けていたとされる。神仙術はインドのヨーガと同様に誤解されているが、実はカッパーラに他ならない。つまり、徐福もカッパーラの使い手だったのである。だからこそ、始皇帝の命を受け、不老不死の妙薬を探しに出掛けたのである。その渡来の際に引き連れた一団が、物部氏となっ

たのである。(不老不死の妙薬を求めた徐福の話は、田道間守(タジマモリ)の話として伝えられている。)そのため、飛鳥氏は“不老不死”などはどうしてもよく、実は東の海を渡った地に新たなユダヤ王国を築くことを徐福は始皇帝から命令された、としている。しかし、それはどうなのか？

*田道間守 (Wikipedia 参照)

第11代・垂仁天皇の時代、常世の国に不老不死の妙薬である非時香果(ときじくのかぐのこのみ)を探しに行った田道間守は、10年掛けて葉付きの枝と果実付きの枝を日本に持ち帰ってきたが、垂仁天皇は既に崩御していた。田道間守は半分を垂仁天皇の皇后に献上し、残りを垂仁天皇の御陵に捧げ、悲しみのあまり泣き叫びながら亡くなったという。

なお、田道間守が持ち帰った非時香果は橘のこととされている。“たちばな”という名称は、田道間花が転じたとする説もある。また、菓子の「菓」は果物のことであるが、この話から、田道間守は菓子の祖とされている。

(3)海部宮司の発言

飛鳥氏の推理が正しいとすれば、また、八咫鳥の言葉を文字通り受け止めるのなら、徐福渡来以前に物部氏は日本の地になかったことになる。そして、海部氏=尾張氏は物部氏の王族=エフライム族だから、徐福並びにその側近がエフライム族ということになり、アロンの杖を持って来たことになる。

アロンの杖は族長の印であり、権威=王権の象徴でもある。それを支那の地域で徐福が持っていたとは考えにくく、持っていたとすれば、権威と権力を手中にしていた始皇帝に他ならない。徐福は伝説上、支那には戻っていないから、徐福はアロンの杖を始皇帝から譲り受けたことになる。しかし、アロンの杖は王権の象徴だから、いくら同族と言えど、始皇帝が徐福に渡した時点で始皇帝は皇帝ではなくなり、徐福が新たな皇帝となる。これは、どう考えても辻褄が合わない。では、海部氏=尾張氏とアロンの杖、徐福との関係はどう考えたら良いのか？

籠神社の海部宮司は、海部氏=尾張氏は物部氏とは格が違う、と言われている。これは、物部氏は基本的に失われた十支族であり、海部氏=尾張氏が失われた十支族の中の王族たるエフライム族であるからに他ならない。だからこそ、他の物部氏とは格が違うのである。

ここで着目すべき点は、“格が違う”という点である。これを素直に解釈すると、“海部氏=尾張氏と物部氏は別だ”ということである。海部氏=尾張氏は秦氏に最後まで抵抗し続けた物部氏のトップであるはずだが、どう解釈したら良いのか？

そこで、八咫鳥の言葉を思い出すと、徐福と共に渡来した集団が物部氏である。ならば、海部氏=尾張氏は彼らとは別に渡来したのではないか。先に王族のエフライム族が渡来していれば、そこに王権の象徴たるアロンの杖があるが故、徐福に率いられた集団が失われた十支族として容易にまとまり、物部氏と

いう1つの集団と成り得る。

また、東の海に不老不死の国があるというのも、そこに某かの民族がおり、その伝承が大陸まで伝わっていたからに他ならない。失われた十支族の王族たるエフライム族＝海部氏＝尾張氏が徐福よりも先に日本列島に渡来していたのなら、神器の1つ、アロンの杖がある以上、儀式を執り行うレビ族も共に渡来していたに違いない。レビ族は南北両イスラエルに存在し、カッパーラを扱うことができる。そして、“不老不死”とは「生命の樹」の奥義を知ることには他ならない。つまり、“不老不死の国”とは“「生命の樹」を基にしたカッパーラを駆使する国”のことに他ならない。飛鳥氏が言うように、“不老不死”などはどうでもよく、東の海を渡った地に新たなユダヤ王国を築くことを徐福は始皇帝から命令された、のではないのである。

つまり、エフライム族＝海部氏＝尾張氏が徐福率いる他の物部氏に先駆けて日本の地に渡来していたと考えるのが妥当である。そして、“不老不死”として象徴されるカッパーラを駆使していた。なお、“不老不死”と古代日本については、更に後述する。

(4) 邪馬台国と物部氏

古代日本といってまず思い浮かぶのは邪馬台国である。邪馬台国は女王、卑弥呼がいたとされるが、秦が統一されたのは紀元前221年、滅んだのが紀元前207年であり、卑弥呼よりも遙か以前に徐福一団は渡来したのである。その時代、既に日本の地に“不老不死の国”があるという伝説があったわけだから、日本列島には何らかの民族がいたことは確実である。

海部宮司の実父、林兼明氏の著書「神に関する古語の研究」に依ると、かつて邪馬台国の“邪馬台”は“ヤマト”と読んでいた。つまり、邪馬台国とはヤマト国であり、籠神社の極秘伝では邪馬台国が近畿にあったという。

古事記では、近畿地方を治めていた那賀須泥毘古（ナガスネヒコ）の妹、登美夜毘売（トミヤヒメ）にニギハヤヒが婿入りしたことであり、ニギハヤヒは物部氏の祖とされている。（籠神社が保有する国宝の系図からも明らか。対して、秦氏の祖はニギである。）そして、海部宮司に依ると、先住民とは平和的友好が持たれたという。ならば、近畿の物部氏＝尾張氏＝海部氏が後の邪馬台国となる国に婿入りして和平が保たれた、ということである。それが、ナガスネヒコの妹にニギハヤヒが婿入りした、という神話として語られているのである。そして、後に婿入りした秦氏が物部氏を抑えて現在の日本の根幹を形成したように、邪馬台国となった大きな国で物部氏が権力を振るっていたのであろう。（丹波を中心にして、近江や出雲を含む広大な地域を支配していたのが、魏志倭人伝に記された投馬（とうま）国であるという。）ならば、後の邪馬台国の女王となる卑弥呼は、物部氏の血統ということになる！

“ヤマト”は天山山脈の麓の弓月王（ゆんず）国＝新月王国＝三日月王国であり、弓月城（くるじゃ）、亀慈（くちや）とも言われた国に由来することは、

<日本の真相>で記した。そして、この地名はヘブライ語で“ヤマトウ”と呼ばれており、“神の民”の意味であり、イスラエルの十二支族を象徴していた。だから、邪馬台国をヤマト国と読む以上、そこにはイスラエルの支族が存在していなければならない。

古事記や日本書紀は天武天皇～持統天皇の時代に編纂されたが、その際、物部氏は伝承資料をすべて没収された。その物部氏の伝承を基に、秦氏の歴史観を絡めて創り上げられたのが、古事記や日本書紀の記紀である。故に、記紀には物部氏の歴史が隠されているのである。

*投馬国

“投馬”というのは当て字の可能性もあるが、文字通り解釈すると“馬を投げる”ことである。馬を投げると言えば、高天原で天照大神と侍女が機織をしていた時、スサノオが皮を剥いだ馬を投げ込んだ話が思い出される。これが原因で侍女（場合によっては天照大神自身）がホト（女陰）を傷つけ、怒りとショックから、天照大神が天の岩戸の奥に隠れたという高天原での最大の事件、“天の岩戸隠れ”が起きた。つまり、“投馬”はスサノオを象徴する。スサノオの象徴は八岐大蛇の尾から取り出した天叢雲剣＝草薙神剣＝アロンの杖であり、物部氏の象徴であるから、“投馬”は物部氏を象徴するのである。そして、物部氏はユダヤ教徒、秦氏は原始キリスト教徒だから、スサノオの狼藉によって天照大神が岩戸に隠れたことは、ユダヤ教徒によってイエスが十字架に掛けられたことを象徴しており、矛盾しない。

天照大神は秦氏の持ち込んだ神であり、スサノオと天照大神は対立する場面が多々見受けられるが、これは秦氏に抵抗する物部氏を象徴している。

(5)ナガスネヒコについての推定

イスラエルの支族が渡来する以前の日本には、ナガスネヒコに代表される民族が日本の国土にいた。では、それはどのような民族なのか。

ナガスネヒコという名前は文字通り解釈すると、スネが長い、ということである。中南米では、大柄の人骨が発見されている。中南米のインディオと古代日本人は共通の風習、例えば刺青の風習などがあり、共通の祖先ではないか、とも言われている。それに、環太平洋地域の民族は風習などが似ており、かつて一大王国が存在したのではないか、という説もある。

<神々の真相 1>で記したように、中南米はカ・インの流刑地だが、最初にニヌルタが連れて行った。後には、ニンギシュジツダがケツアルコアトルとして渡った。ニヌルタやニンギシュジツダがシュメールから中南米に行く途中、後に日本となる地にも立ち寄っていたこと、またカ・インの子孫たちが洪水後に舟で移動した、あるいはニンギシュジツダが後の日本となる地へ連れて行ったことなどは十分考えられる。

つまり、海部氏＝尾張氏が渡来する以前の日本には、おそらくカ・インの血を引く子孫がおり、様々な小国を形成していたと考えられる。それが、ナガスネヒコで象徴される民族である。徐福率いる物部氏あるいは秦氏渡来後は、そ

のような先住民は列島周辺部、つまり沖縄や北海道へ追いやられたのであろう。そのため、そのような地で、古代の風習が色濃く残っているのである。

また、皇太子が天皇へと即位する大嘗祭では、新穀を供える祭殿が2つあり、西側が主基（すき）殿、東側が悠紀（ゆき）殿で、御神事は悠紀殿から行われる。これを、物部氏と秦氏の象徴と見る向きもあるが（西日本が秦氏、東日本が物部氏ということから、主基殿が秦氏で悠紀殿が物部氏）、それだけではないだろう。

シュメールで初物の祝福は、カ・インによる農業の捧げものとアバエルによる牧畜の捧げもので成された。主エンキはエンリルがカ・インを祝福した後に、カ・インの捧げものを祝福することなく、アバエルの子羊を祝福した。これが発端となり、カ・インによるアバエルの殺人、人類初の殺人が起きた。カ・インの象徴がイスラエルの支族渡来以前の民族だとしたら、アバエルの象徴は羊飼いの子孫たるイスラエルの支族となる。つまり、カ・インとアバエルの統一（赦しと和平）が象徴されているとも考えられる。

カ・インは中南米に流刑にされたから、シュメールから見れば東側であり、アバエルはマルドゥクの領地（エジプト）で牧畜を教えられたから、シュメールから見れば西側である。そして、最初にエンリルがカ・インを、続いて主エンキがアバエルを祝福した。つまり、優先される東の悠紀殿はカ・インに相当し、主基殿はアバエルに相当すると考えられる。また、神宮では先に外宮、後から重要な内宮での御神事が執り行われることから、重要なのは後から御神事が執り行われる主基殿である。それは、“主”という文字が象徴している。そして、天皇陛下並びに現日本人はイスラエルの支族で“神の子羊”だから、象徴的には羊に関係するアバエルの系統と見なすことができ（実際にはサティの系統）、アバエルを象徴する主基殿での御神事がカ・インを象徴する悠紀殿の後になる、ということである。

このように、海部氏＝尾張氏を含めた物部氏渡来以前の日本には、カ・インの子孫が住んでいたと考えられる。

(6) 卑弥呼について

① 卑弥呼と物部氏の関係

邪馬台国には女王「卑弥呼」がいたとされ、一般的には次のように考えられている。（Wikipedia 参照。）

“卑弥呼は「魏志倭人伝」に見られる弥生時代後期の倭の女王である。2世紀後半に起きた倭国の大乱は、倭国内の小国群が邪馬台国の一女子、卑弥呼を倭の女王に共立することによって鎮まった。卑弥呼は神の妻として鬼道に長じ、結婚せず、シャーマンの王として人々を臣服させた。倭王になって以来、神に仕えるために宮殿に籠もり、人々の前に姿を見せなかった。彼女に飲食を給し、辞を伝えるのは1人の男子だけであり、一方、婢1000人が侍するというように神秘的ベールに包まれていた。卑弥呼には弟がおり、卑弥呼の託宣に従い政治

的・軍事的政務を担当したという。卑弥呼は 239 年に生口・斑布を献上して魏に朝貢し、見返りに魏は卑弥呼を親魏倭王に任命し、金印を賜与した。

後に、南に位置する男王、卑弥弓呼を擁する狗奴国との戦争に突入した。卑弥呼は 247 年、魏に載斯烏越を派遣し、その戦況を報告させているが、卑弥呼はその後に死んだという。

卑弥呼が死ぬと、男子の王を立てられた。人々はこれに満足せず、内乱状態になり、1000 人が死んだ。このため再び女王を立てられることになり、卑弥呼の親族である 13 歳の少女、台与（トヨ）が王となり、国は治まった。248 年に邪馬台国と狗奴国間の紛争の報告を受けて倭に派遣された帯方郡の塞曹掾史張政は、檄文をもって台与を諭した。”

物部氏のトップたる尾張氏＝海部氏は失われた十支族＝北イスラエル王国であり、北イスラエル王国は背教が原因で滅びた。背教には偶像崇拜だけではなく、女霊媒師や女占い師、口寄せに頼ること、女子供に火渡りさせることなども含まれており、物部系の寺社では火渡り神事を行うようなところもある。つまり、十支族の系統には常に背教の影がつきまとう。

卑弥呼が物部系の邪馬台国の巫女ならば、それはかつて北イスラエルで行われた背教、すなわち、女霊媒師や女占い師、口寄せに頼ることそのものである。そして聖書では、霊媒師や占い師、口寄せは死刑に値する、とある。（レビ記 20 章。）女王「卑弥呼」は女霊媒師あるいは口寄せに相当するからこそ、“鬼道に入っていた”とされているのであり、背教と矛盾しない。

しかし、別の見方もできる。卑弥呼を霊媒師ではなく、女預言者と見る見方である。女預言者は聖書にも登場する。代表的な女預言者はミリアムとデボラである。ミリアムはアロンの姉であり（出エジプト記 15 章）、デボラは 12 人の士師の 1 人である。（士師記 4 章、5 章。）共にミリアムの歌、デボラの歌として知られる歌があり、民から支持されている。女預言者は霊媒師や口寄せと違って、聖書では禁止されていない。卑弥呼が霊媒師ではなく女預言者ならば、女王を兼ねる卑弥呼が人々から認められていたことは納得できる。何よりも、北イスラエル王国は背教が原因で滅び、後に物部氏は偶像崇拜となる仏教の導入を頑なに拒んだから、渡来して物部氏となったユダヤ教徒は聖書で禁じられていることは行わなかったとも推定できる。

仮に、このような女預言者が魏にいなかったとしたら、王の権威ではなく、お告げによって国を動かす魔道と見なし、“鬼道”という表現にもなるだろう。“鬼”は悪のようなイメージがあるが、熊野一帯を今でも治めている九鬼（くき）一族は元々“くかみ”と読み、九鬼家に伝わる古伝書が九鬼（くかみ）文書である。そうすると、“鬼道＝かみ道＝神道”となり、卑弥呼は聖書で禁じられていた霊媒師などではなく、「神」の御言葉を民に取り次ぐ女預言者と解釈しても理に適っている。それに、ミリアムやデボラは旧約に於ける記述であり、物部氏と関係が深い。

なお、このような女預言者とそれを支える男性の関係は、神宮に於ける重要な御神事に於いて、天皇陛下と縁の深い女性が祭主を務め、それを男性の大宮

司が補佐する関係に反映されている。

②卑弥呼と天照大神の相関

また、通説では卑弥呼は天照大神のモデルという説がある。(卑弥呼＝天照大神は言うまでもなく誤り。)万葉までの固有名詞の漢字は当て字が多いから、“ひみこ”という読み注目すれば、“日巫女”とも書ける。つまり、“日の神に仕える巫女＝日の神に仕える女預言者”ということである。(この場合の「巫女」は預言者なので、現在の神社に於ける巫女とは異なる。)日の神に仕える女預言者だから、“日の神たる女神”自身ではない。

籠神社には国宝に指定されている最古の家系図があるが、そこには卑弥呼を連想させる名前が記述されている。

天照大神－天押穗耳尊－天照國照彦天火明命－天香語山命－天村雲命
－天忍人命－天登目命－建登米命－建田勢命－建日瀉命（大海宿称命）
－市大稻目命－意富那比命（大海宿称命）
－乎縫命（小縫命）┆小止與命（小登與命）┆建稻種命－…
┆日女命┆┆宮簀媛命（日本武尊の妃）

海部宮司に依ると、日女命が卑弥呼、小止與命が台与に相当する可能性があるという。(テレビ東京「新説・歴史ミステリー」参照。)確かに、日女命は“ひめこ＝ひみこ”と読めるし、卑弥呼は女性天皇と同じで一時的な王であり、その後は小止與命の系統になっていることは、伝承と矛盾しない。

この系図では天照大神の後に日女命がきているが、天照大神は秦氏が持ってきた神で、それ以前に渡来している物部氏の神ではない。前述のように、様々な伝承は物部氏の資料を基に、秦氏の歴史観を絡めて創り上げられた。だから、このようなことになっている。また、この系図に於ける小止與命は男性であるが、卑弥呼の伝承に於ける台与は女性である。しかし、資料には物部氏の真相が隠されているから、おそらく、海部宮司の言われる日女命と小止與命の関係は、卑弥呼と台与の関係を象徴していると思われる。

更に興味深いことに、小止與命とは尾張国造であった乎止與命（オトヨノミコト）と同じであり、その娘が日本武尊の妃、宮簀媛命（ミヤスヒメノミコト）である。日本武尊は第12代・景行天皇の皇子であり、九州から東国まで日本各地を平定し、東国平定の後、尾張国造の女（むすめ）である宮簀媛命を妃に迎えた。その後、能褒野（のぼの）にて亡くなり、白鳥と化して空へ飛び立ったという。尊亡き後、尊が伊勢の倭姫命から授かっていた草薙神劍を、宮簀媛命が熱田の地に祀ったのが熱田神宮の創祀である。つまり、この系図は海部氏の極秘伝であるが、見事、同族の尾張氏の系図にもなっており、その中に邪馬台国の卑弥呼を象徴する日女命があることは、卑弥呼が物部氏の王族たる海部氏＝尾張氏＝エフライム族の一族だったと言える。

また、日本武尊に草薙神劍を授けた倭姫命は第11代・垂仁天皇の第4皇女であり、日本武尊の叔母にあたる。豊鍬入姫命（トヨスキイリヒメノミコト）の後

を継いで御杖代として天照大神に奉仕して、御神慮によって現在の伊勢の地に皇大神宮を創建し、倭姫命から後、代々の天皇は未婚の皇女を神宮に遣わして天照大神に奉仕されたが、この未婚の皇女を斎王(いつきのみこ)と言い、斎宮の直接の起源である。倭姫命は神宮に於ける年中のお祭りや奉仕者の職掌、斎戒や祓の法、神宮所属の宮社を定め、神宮に於ける祭祀と経営の規模を確立された。(伊勢神宮ホームページ参照。)これは、現在の神宮に於ける祭主に繋がる。(祭主は神宮神職の長である。)つまり、倭姫命は神にお仕えした独身の女性であり、卑弥呼と同じ役割である。名前も“倭の姫”であり、倭国の姫で女王たる卑弥呼を象徴している。そもそも“倭”という名称は支那が日本を見下して使っていた蔑称だから、そのような名称を神宮にお仕えする女性が名乗ることは無く、何かの象徴と捉えなければならない。それに、実質の初代天皇は第15代応神天皇だから、それ以前は架空であり、日本武尊の逸話は何らかの象徴なのである。また、先程の系図で日本武尊の(義理の)叔母に相当するのは日女命であり、これからも、倭姫命は卑弥呼がモデルであると言える。

なお、日本武尊に縁の熱田神宮の近くには、死後、白鳥となって飛び去った尊が降り立ったと言われる地に白鳥古墳(白鳥御陵)があり、そのすぐ傍に東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳がある。この古墳は尾張氏の首長の墓とされているが、宮簀媛命の墓とする伝承もあり、尊の死後、宮簀媛命が再婚しなかったことから名付けられたとも言われている。白鳥古墳が造られたのは5~6世紀頃だから、断夫山古墳もおそらくその時代に造られたものであろう。そうすると、日本武尊の逸話はこの時代よりも前のことだから、この古墳も何かを象徴していると考えた方が良い。断夫山とは“夫を断つ”ことであり、“再婚しなかった”という意味以外に、“結婚しなかった女性”という意味としても解釈することができる。そうすると、東海地方最大の前方後円墳であるということは、東海地方最大の勢力を誇っていた尾張氏の最重要人物に関係があることを示唆し、その名称が“結婚しなかった女性”ということは、尾張氏に縁の女王、卑弥呼を象徴していると考えられる。ただし、この古墳が卑弥呼の墓かどうかは、詳しい発掘調査の結果が待たれる。

さて、卑弥呼と言え、魏から授かったという100枚の銅鏡がある。この銅鏡の行方はさておき、卑弥呼以前は銅鐸が神の象徴として用いられていたが、卑弥呼の時代から鏡が神の象徴、依代として用いられるようになった。そのため、天照大神の“天の岩戸隠れ”神話に於ける鏡の話は、卑弥呼が神事で扱っていた鏡が原型だ、ともされている。

さて、その卑弥呼が神事で扱っていた鏡だが、籠神社の御神宝たる息津(おきつ)鏡と辺津(へつ)鏡こそ、その可能性がある。これらは、籠神社歴代の宮司が代々手渡しで継承している秘宝であるが、実は物部氏の有する十種の神宝の内の2つである。息津鏡は栄えをもたらすもの、沖の方の海原の象徴、あるいはその海原に映る太陽の象徴であり、辺津鏡は栄えをもたらすもの、海岸周辺の海原の象徴、あるいはその海原に映る太陽の象徴である。いずれも、籠神社に関係の深い海と太陽を象徴し、意味的には“沖の方の海原”と“海岸周

辺の海原”で「合わせ鏡」を成す。息津鏡は直径 175mm で後漢時代のもの、辺津鏡は直径 95mm で前漢時代のものである。これらは天祖の御神宝であり、籠神社主神の彦火明命が授けられたと伝えられるものである。彦火明命の後は市杵嶋姫（イチキシマヒメ）命であるが、秘伝の 1 つに依ると亦名が天照大神となっていた。市杵嶋姫命の亦名が天照大神ということは「多次元同時存在の法則」である。多次元同時存在の法則については飛鳥氏が海部宮司から直接聞き出したものかと思っていたが、社務所で購入した「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」（元伊勢籠神社社務所発行）にもはっきりと記載されていた。



市杵嶋姫命とは、天照大神とスサノオが天真名井（あめのまない）で行った誓約の際に、スサノオの十握剣（とつかのつるぎ）から生まれた 5 男 3 女神の中の一柱である。3 女神を宗像三女神と言う。宗像大社（福岡県宗像市）の辺津宮に祀られており、辺津宮の御祭神である。

市杵嶋姫の誕生については、日本書紀でもいろいろな説がある。本文では、十握剣から田心姫（タゴリヒメ）命→湍津姫（タギツヒメ）命→市杵嶋姫命の順に誕生している。一書では瑞八坂瓊之曲玉（みつのやさかにのまがたま）から市杵嶋姫命→田心姫命→湍津姫命の順に誕生しており、更に一書では十握剣、九握剣、八握剣から瀛津嶋姫（オキツシマヒメ）命（＝市杵嶋姫命）→湍津姫命→田霧姫命（田心姫命）の順に誕生している。市杵嶋姫命は宗像大社の辺津宮に祀られているが、一書には市杵嶋姫命＝瀛津嶋姫とある。そうすると辺津＝息津となる。そして、この“瀛”という字は、始皇帝と徐福の姓“嬴”にさんずいを付けたもので、何らかの関係を暗示させる。

また、秘宝となるほどの鏡と言えは八咫鏡であるが、八咫鏡は天孫降臨の際、天下るニニギに天照大神が自分の魂だと思って大事に祀れ、と宣託して渡された御神器である。つまり、八咫鏡は天照大神の分身に相当し、市杵嶋姫命の亦名が天照大神だから、これも分身と見なすことができる。よって、辺津＝息津＝市杵嶋姫命＝天照大神＝八咫鏡となり、息津鏡と辺津鏡こそが八咫鏡の原型であることが解る。

では何故、2 枚の鏡となるのか？それは、八咫鏡がモーゼの十戒の象徴であり、

十戒石板は 2 枚で「合わせ鏡」となるからである。そのため、実際の鏡として八咫鏡の原型となったものも 2 枚ということになり、息津鏡と辺津鏡で「合わせ鏡」を象徴しているのである。これは、前述の両鏡の意味からも言えよう。そして、「合わせ鏡」の中の像は無限に続くような錯覚を引き起こすが、これは始皇帝と徐福が求めた“不老不死、永遠”をも象徴している。これが、“瀛”と“嬴”が暗示するものである。(なお、秦氏渡来以前、モーゼの十戒はまだ日本に存在しないが、秦氏でなくともイスラエルの支族であれば、モーゼの十戒と「合わせ鏡」のカッパーラは知っているはずである。)

つまり、卑弥呼が女神としての天照大神の原型であり、八咫鏡の鏡としての原型が息津鏡と辺津鏡であるならば、卑弥呼が神事で扱っていた最も重要な鏡は、魏から授かったという 100 枚の銅鏡ではなく、物部氏のトップである海部氏が代々手渡しで大切に伝承してきた息津鏡と辺津鏡に間違いのないだろう。解るところに堂々と隠すのが、カッパーラの常套だからである。息津鏡と辺津鏡は前漢・後漢時代のものであり、卑弥呼がいた三国（魏・呉・蜀）時代よりも前から存在しているから、時代考証的にも矛盾しない。魏から授かったという 100 枚の銅鏡は、地方の豪族(他の物部氏)らに分け与えられたのかもしれない。

また、市杵嶋姫の「イチキシマ」は「齋き島」に通じ、神に齋く島の女性(巫女)という意味になり、卑弥呼そのものである。巖島神社(広島県廿日市市)の祭神ともなっており、「イツクシマ」という社名も「イチキシマ」が転じたものとされている。なお、弁財天の和名が市杵嶋姫である。弁財天はブラフマーの妃サラスヴァティーで、女神の中の女神であり、女神としての天照大神の分身として相応しい。

最近発掘された纏向遺跡では、大宮殿と思われる建物の跡が発見され、邪馬台国近畿説の信憑性が一気に高くなった。柱の配置は御所の内裏や伊勢神宮、東大寺など、秦氏系の建造物では見られない、建物の中心を柱が貫く構造である。しかし、同じ構造なのが出雲大社である。出雲は物部氏だから、邪馬台国が物部王国であること、近畿に存在したことが裏付けられたのも同然である。それに、この遺跡の近くには、物部氏最古の神社、国内最古の神社と言われる大神(おおみわ)神社がある。ここは本殿が無く、三輪山を遙拝し、2本の柱に縄を掛けた鳥居の原型がある。そして、この鳥居の原型は、古代エルサレムの神殿のものと同じ構造であり、三輪山はモリヤ山に相当する。

このような状況から、纏向遺跡は邪馬台国の重要な遺跡であることに間違いのないだろう。

③狗奴国

そうすると、南に位置する男王、卑弥弓呼を擁する狗奴国とはどこになるのか。飛鳥氏は魏志倭人伝を正確な歴史書と見なし、その距離関係から、現在の日本列島の配置では成り立たず、西日本が南北逆の状態からひっくり返り、そこに東日本が衝突した、などという極秘「M ファイル」を基にした説を展開している。それに依ると、現在北にある北海道が南に存在したことになり、それこ

そが狗奴国で、その末裔がアイヌである、という説である。

しかし、プレートテクトニクス理論や日本列島の地層構造からして、そのようなことはあり得ない。詳しい地質調査に依る研究から、日本列島はユーラシア大陸の端にあったが、それが移動し、かつ折れ曲がることによって現在の形を形成したことが判明している。その折れ曲がりの痕跡がフォッサマグナであり、現在の日本列島に近い状態となったのが約 50～100 万年前と推定されている。フォッサマグナは大きな溝、引き裂かれたような痕跡であり、大衝突の痕跡ではあり得ない。よって、飛鳥氏が言うような、邪馬台国の時代に列島が衝突したなどということは起きていないのである。（このような場合、飛鳥氏はアカデミズムを否定する。）

飛鳥氏は明日香の亀石の向きが自説の正しさを証明しているという。亀石には、次のような預言めいた伝説があるが、飛鳥氏はこれを歴史的事実として認識するため、日本列島南北逆転回転衝突説を主張する。

“昔は北向きだったが、それから東向きとなった。そして、西向きになると周囲が泥の海に沈む。”

しかし、地磁気の逆転現象により南北逆転は説明することが可能であり、列島の折れ曲がりにより東西の向きは説明できるので、南北逆転回転衝突説は必要無い。また、古地磁気分析により、東日本列島は青森県を中心にして反時計回りに回転し、西日本列島は九州北部を中心として時計回りに回転したことが判明している、などとも主張しているが、東日本は反時計回り、西日本は時計回りに回転するように折れ曲がったのであり、回転衝突したのではない。

学研ムーの 2009 年 12 月号別冊付録「金印の謎」の中では、八咫鳥の使者である烏天狗が飛鳥氏の日本列島南北逆転回転衝突説を認めたように描かれている。そして、その印として何と、卑弥呼が魏から授かった金印を見せてもらい、その写真が掲載されている！（確かに、「親魏倭王」と刻印されていた。）卑弥呼はやはり物部系の大和民族で、金印は代々物部一族が継承し、現在は八咫鳥が関西の某所で預かっているという。しかし、彼の漫画は基本的にフィクションであり、飛鳥氏自身もそう言っている。烏天狗と会ったこと、金印を見せてもらったことは事実であろうが、烏天狗が飛鳥氏の日本列島南北逆転回転衝突説を認めたことは、おそらくフィクションである。烏天狗が飛鳥氏に金印を見せたのは、以前に八咫鳥から“物部氏は徐福と共に来た”という情報を聞き出した故の印であろう。

烏天狗に依ると、三笠山（若草山）より南は琵琶湖の水が残っていたという。（奈良盆地は元々巨大な湖だったことは<神々の真相 2>で記した。）それは、奈良時代の謡曲「海土（あま）」の一節に残っている。ここでも、海部氏に關係の深い名称「あま」である。

“三笠山 今ぞ栄えん 此岸の 南の海に急がんと…”

三笠山から吉野までは琵琶湖の痕跡による湖あるいは湿地帯だったのである。その南は熊野の山々であるから、現在の熊野こそが狗奴国と考えて良い。“狗奴＝くま＝くま”で、熊野に繋がる。そして、後に物部氏（尾張氏）縁の日本武尊が討伐したのも熊襲で“くま”であり、“くま”という言葉により、敵対する民族を象徴していると考えられる。狗奴国は邪馬台国と同規模で南にあったと言われているが、邪馬台国が奈良盆地に収まる程度の規模であれば、現在の奈良盆地の南にある熊野の山岳地帯も同規模と言える。倭国は様々な小国が存在し、倭国内の小国群が邪馬台国の一女子、卑弥呼を倭国の女王に共立したのだから、必ずしも邪馬台国が国として大国であるという必要は無い。つまり、魏志倭人伝に記載の様々な小国の位置関係や距離関係は、飛鳥氏の言うような日本列島南北逆転回転衝突説を裏付けるものではなく、象徴的に書かれたものと解釈すべきである。あるいは、誇張表現により強調しているとも考えられる。

また、狗奴国は邪馬台国に抵抗し、邪馬台国では湖水の向こうから襲ってくる狗奴国の舟を高台から見張っていたという。ならば、この湖水こそ、三笠山より南に残っていた琵琶湖の水に他ならない。

更に、古事記での対応を考えると、神武天皇が開いた大和朝廷を「ヤマト＝邪馬台」と見なせば、熊野の山で神武天皇らは巨大な熊に姿を変えた荒ぶる土地神によって神罰を与えられ、軍勢もろとも 1 人残らず気を失って地に倒れ伏したから、熊野の荒ぶる土地神、熊野の土地は邪馬台国に対抗していた狗奴国に相当する。

そして、熊野にいた高倉下命が一振りの太刀を持ってやって来て、倒れている神武軍にそれを差し出すことにより敵は自ら倒れ、神武軍は勝利を得た。この太刀は布都御魂として石上神宮に祀られたが、実は草薙神剣であることは<神々の真相 2>で記した。高倉下命はニギハヤヒが高天原にいた頃に生まれた彼の息子であり、尾張氏の祖である。ならば、高倉下命はかつて邪馬台国と和平を結んだ尾張氏＝海部氏の象徴となり、矛盾しない。

尾張氏＝海部氏は秦氏の大王たるイワレヒコ（後の神武天皇）に最後まで抵抗していたが、最終的に和平を結び、天皇の外戚たるまでに至った。だから、勘違いしやすい部分ではあるが、尾張氏＝海部氏は狗奴国ではない。それは、古事記で次のように象徴されている。

“イワレヒコらは熊野を下して進軍したが、ナガスネヒコの軍勢に手こずった。その時、金鵝が飛んで来てイワレヒコの弓の先に止まり、ナガスネヒコの軍はおののいて力を失った。ナガスネヒコはイワレヒコの軍に使者を遣わし、自分は天孫ニギハヤヒに仕えているが、イワレヒコも天孫ニニギの子孫であることが判った。しかし、既に戦いは止めることができないところまできており、ナガスネヒコは自分の主のためにあくまで戦おうとした。

だが、ニギハヤヒは天津神が本当に気に掛けているのはニニギの子孫だけだと知り、逆にナガスネヒコを討ち、残った部下と共にイワレヒコに帰順した。イワレヒコは、ニギハヤヒを臣下に加えて寵愛した。”

天孫は「神」から選ばれた民を象徴しており、それはイスラエル十二支族に他ならない。イスラエル十二支族は北イスラエル王国の十支族と南ユダ王国の二氏族に分かれるが、ユダヤの王の正統はユダ族であるから、南ユダ王国がニギの血統ということになる。対して、北イスラエル王国は傍系だからニギハヤヒの血統ということになり、北イスラエル王国の王族たるエフライム族＝尾張氏＝海部氏の、祖神がニギハヤヒであるという伝承に矛盾しない。そうすると、ニギハヤヒに仕えて最後まで戦おうとしたナガスネヒコは、尾張氏＝海部氏が渡来して和平を結んだ、後の邪馬台国となる民族、カ・インの子孫たちである。ニギハヤヒとナガスネヒコは民族が異なるため、ニギハヤヒはナガスネヒコを討って、同じイスラエルの支族、ニギの子孫たるイワレヒコに帰順したのである。そして、最後まで抵抗したカ・インの子孫がいた土地は“鬼”として表現されている。熊野は昔から、九鬼一族が治める土地である。なお、九鬼一族は物部氏（尾張氏一族）であり、カ・インの子孫ではない。つまり“本物の鬼”ではないから、“鬼”の上の点を取った字を書く場合もある。この“点”は鬼の角を象徴している。

狗奴国も、ナガスネヒコで象徴される前邪馬台国の民族もカ・インの子孫だった。だからこそ、邪馬台国の“卑弥呼”、狗奴国の“卑弥弓呼”のように、似たような名前が使われており、罪を犯したカ・インを象徴して“卑”という字が使われているのであろう。そして、ナガスネヒコは渡来したエフライム族、そして物部氏に従ったが、狗奴国は従わなかった。だから、狗奴国としては、異民族に従った邪馬台国は許せず、それ故に険悪な関係だったのだろう。

また、狗奴国や邪馬台国では一般的に刺青が見られたという。刺青は世界的に見られるが、主に南方系民族の風習で、これからも両者がカ・インの子孫であると言える。刺青には呪術的意味合いもあるが、罪人を区別する意味もある。カ・インはアバエルを殺した罪人で、印を付けて区別された。ならば、刺青はカ・イン並びにその子孫を象徴しているとも言える。（実際には、髭が生えないようにされたことは<神々の真相 1>参照。）旧約聖書では刺青を禁じているから（レビ記 19 章）、物部氏＝ユダヤ教徒に従わなかった刺青をした民族は“鬼”として象徴されている。しかし、物部氏は失われた十支族で背教の歴史を背負っているし、また和平を維持するために、聖書では禁止されている刺青だけは認めたのであろう。

また、大嘗祭に於ける東の悠紀殿はカ・インに相当し、西の主基殿はアバエルに相当することは前述したが、カ・インの子孫（熊野）が狗奴国に相当し、後に東国、蝦夷へ移動したとすれば、東はカ・インの子孫、西は邪馬台国から大和朝廷に連なるアバエルの象徴たるイスラエル十二支族ということになり、矛盾しない。

他にも、環太平洋地域には似たような石像が存在する。それは、明日香村にある猿石である。渡来人を象ったもの、などと言われていたりするが、手の位置が特徴的であり、それに着目すると、マルケサス諸島やタヒチの神チキ像、イースター島のモアイ像などがある。

“猿石”を文字通り解釈すれば“猿の石”であり、それで思い浮かぶのは石から生まれた孫悟空である。そして、もう 1 つはトート神である。トート神は岩の卵から生まれたという。トート神は魔術の象徴でもあるヒヒの姿で描かれることもあり、これにより孫悟空以外で猿と石が結び付く。つまり、猿石はトート神＝ニンギシュジツダ＝ケツアルコアトルを象徴しており、ニンギシュジツダは環太平洋地域に関わっていたから、これらの地域に似たような石像が多数存在するのである。



そうすると、猿田彦の猿としてのモデルもニンギシュジツダということになる。猿田彦は天孫降臨でニニギを導き、ニニギは天照大神から稲穂を渡され、豊葦原の国を開拓して暮らしを立てるよう神勅された。稲穂は日本の食の根幹を成すものであるが、ニンギシュジツダはドゥムジと（アダパと）共にニビルに行き、ニンギシュジツダはニビルの穀物の種子を、ドゥムジはニビルの羊を与えられ、地球上に食糧が普及した。主エンキが初物の祝いで祝福したのはアバエルの羊であり、神話での稲穂は天照大神に祝福されているので、主エンキから祝福された羊を象徴する。つまり、この場面でニニギに相当するのはドゥムジである。ドゥムジは天界＝ニビルの大神アヌから見れば孫であるから、まさに“天の神の孫＝天孫”となる。そして、ドゥムジに付き添っていたのはニンギシュジツダであり、猿田彦に相当する。

また、“神”は“申が示す”ということで、申＝猿は神の使いとされているが、猿で象徴されるニンギシュジツダは主エンキ（＝この場合の「神」）の息子で、人類を創成し、世界中にピラミッドを建造したりした「知恵の神」であり、カッパーラという象徴で“神々の真相”に導く存在である。つまり、“ニンギシュジツダ＝猿＝申が示して”いるのは“神”である。それに、申の刻は重要な御神事が行われる午後 8 時であるが、“8”は救世主の象徴で、大元は金星と地球の公転周期の関係から導かれる数字である。（＜神々の真相 6＞参照。）そのような金星の動きが重視されているのは、ニンギシュジツダが作成したマヤ暦であり、謎を解く鍵を金星と地球の関係に残したのである。つまり、“8”はある意味、謎を解く鍵を残したニンギシュジツダの「知恵」を象徴していると言っても良い。

なお、後述するが、熊野の沖、串本沖にも海底遺跡があった。ならば、そこにあったのが本来の狗奴国であり、海底に没してから熊野に移動した可能性がある。海底遺跡については後述するが、海に没した大変動が起きたのはあくまでも約 2 千年前のニビルの接近時であり、邪馬台国の時代ではない。だから、魏志倭人伝に書かれている邪馬台国の南にある狗奴国とは、串本沖の国を指しているのではなく、熊野のことである。

さて、イカサマ女霊媒師は数多いが、現在でも人々から崇められている存在がいる。それは、沖縄のユタとノロ、青森のイタコである。沖縄には神道の原始信仰とも言える信仰が残っており、沖縄、青森共に海底遺跡がある。実は、これらと物部氏の関係は深い。

(7) 沖縄の信仰と海底遺跡

A：沖縄の信仰

かつての日本の中心はヤマトであり、そこから文化は同心円上に広がった。逆に言えば、東北・北海道や九州・沖縄には古代の風習が残っている。信仰という点では、沖縄と青森の女霊媒師は有名である。沖縄ではユタ、青森ではイタコと言うが、これもユタ＝イタ＝イタコで語源は同じである。

沖縄にはノロという巫女がいるが、これは王と並ぶ権力を持った女祭司であり、卑弥呼がいたころのヤマト＝物部王朝を彷彿とさせるものである。ならば、沖縄も最初は南方系民族だったのかもしれないが、後に物部氏の支配下となったのである。また、沖縄には何故か仏教が根付かなかったが、これなども、神道を固持する物部氏を彷彿とさせる。そのため、古代の信仰が比較的そのままの状態に残されている。沖縄では山や洞窟などを御神体とする自然信仰が盛んであり、特に御嶽（うたき）信仰は有名である。本土での山の信仰と言えば、信州の御嶽（おんたけ）信仰が有名であるが、見るからに「うたき」＝「おんたけ」であり、語源が同じであることを示している。御嶽（おんたけ）は信州、つまり諏訪大社に代表される物部氏の拠点にあり、沖縄と古代物部信仰との繋がりを伺わせる。

また、沖縄の創世神話（祖神はアマミキヨ）も、古事記に良く似ている。

“初めに日神（てだ）あり、美しく照り輝けり。
日神海原を見はるかすに、島のようなものありければ、
アマミキヨを召して、島を造れ、と宣り給いき。
アマミキヨ、詔（みことのり）のままに降りて、許（かず）多くの島を造りぬ。
日神成るを遅しとし、更に詔勅して、
アマミヤの人を産まずして、下界の人を産め、と宣り給いき。”

沖縄人は“うみんちゅう＝海人”であることを自負している。ならば、その神は海神と見なすのが妥当である。海人＝海神であり、海人は“アマ”とも読めるから、アマミキヨの“アマ”は“海、海人、海神”のことである。“アマ”を司るのがアマベ＝海部であり、海神たるワタツミノカミを祀り上げるのは物

部氏のトップたる籠神社の海部氏であり、沖縄にもワタツミ信仰がある。つまり、海神信仰という点でも、沖縄は物部氏、特に海部氏＝尾張氏と深い繋がりがある。

他に、琉球王朝の祖は源為朝であるという伝説が沖縄にはある。沖縄固有のタメトモハゼなどというのも、為朝に因んだものと言われている。真偽はともかく、<日本の真相 2>で記したように、源氏は物部系である。このような物部氏の原始信仰が見られる沖縄ならば、為朝が縁を伝って沖縄の地に流れ着き、琉球王朝を創設したということも、納得できるものである。

さて、海＝アマ＝アメならば、籠神社が極秘伝としている天之御中主神＝豊受大神＝天照大神の天之御中主神は海之御中主神ということでもあり、それはシュメールの海神で地球の主たるエンキ＝ヤーに他ならない！エンキは蛇神でもあるが、最近の調査（テレビ東京「新説・歴史ミステリー」参照）で沖縄にピラミッドを彷彿とさせる遺跡や蛇の像がある海底遺跡が発見され、話題を呼んでいる。では、そこにはどんな意味が隠されているのか？

B：海底遺跡

①蛇と遺跡

沖縄にはピラミッドを彷彿とさせる遺跡群と、巨大な海底遺跡群がある。特に海底遺跡には、2匹の蛇が鎮座しているものもある。2匹の蛇が鎮座する遺跡はマヤにも見られる。チチェン・イツァにある巨大なピラミッド神殿エル・カステージョである。これは“ククルカン（羽毛のある蛇）の神殿”と呼ばれており、春分と秋分の夕方、神殿を成す9層の基壇の影が、中央階段の側面に蛇の胴体となって映し出される“ククルカンの降臨”現象が発生する。

マヤ文明の根源はニンギシュジツダであり、彼は“羽毛のある蛇、ケツアルコアトル”と言われ、2匹の蛇が絡まるカドゥケウスの杖が象徴である。その2匹の蛇が神殿にも象徴されているのであり、天文学に通じたニンギシュジツダの「知恵」が満載されているのである。

ならば、沖縄の海底遺跡にある2匹の蛇もニンギシュジツダを象徴しているのである。それは前述のように、海部氏＝尾張氏を含めた物部氏渡来以前の日本にカ・インの子孫が住んでいたことの裏付けにもなる。

無論、番組ではニンギシュジツダやマヤとの関係を持ち出すはずは無いが、他のシリーズでは宗像大社の沖ノ島海底遺跡（海底遺跡からはアダムとイブを象徴する一対の像を発見、<神々の真相 5>）、籠神社“海の奥宮”の海底遺跡、青森や串本沖の海底遺跡なども紹介されていた。各地の海底遺跡は神社の奥宮となっているところが多く、それは取りも直さず、神社もしくは神社の原型となる神殿が存在した時代あるいはそれ以前の時代から“地上に”存在していたことの証拠である。さもなくば、海の深いところに存在する海底遺跡の存在など、当時の人たちが知る由も無いからである。

これらの海底遺跡を含めた世界中の巨大建造物は、すべてニンギシュジツダとニヌルタが建造したことは<神々の真相 1>で記した。ピラミッドのように地

上に残っているものもあるが、海岸近くにあったものは、約 2 千年前のベツレヘムの星で象徴されるニビルの接近で水没したのである。それは、イエスが十字架に掛けられた時の大変動に他ならない。つまり、約 2 千年前に水没したから、それ以前に渡来して王国を築いていた物部氏は、そのような遺跡の存在を知っており、奥宮として祀っているのである。(その後、秦氏によって封印された。)

そして、海底遺跡があるところには浦島伝説が多く、それは竜宮＝琉球に繋がる。「竜」は蛇の化身であり、「竜」に三叉の合わせ鏡を象徴する草冠(艸)の「合わせ鏡」となる竹冠を付ければ「籠」となり、竜宮は籠宮＝このみや＝籠神社に繋がる。また、浦島伝説発祥とも言われる浦島神社は籠神社と同じ丹後にある。このように、竜宮伝説でも籠神社＝物部氏と琉球＝沖繩の繋がりが見て取れる。

② “不老不死” との関係

沖繩の遺跡に話を戻すが、番組では遺跡にフェニキア文字が刻まれていることを紹介していた。そして、航海術に長けたフェニキア商人が海を越えて渡来し、このような神殿を築いた、としていた。しかし、商人がピラミッドのような神殿を建造することは不可能であり、神殿建造の真相は前述の通りである。では、フェニキア文字は何を意味するのか？

フェニキアは確かに商業で栄えた街であり、航海術に長けた彼らは地中海沿岸のみならず、インドの方まで交易を行っており、“海の民＝海人”でもあった。そして、聖書で忌み嫌われるカナン人が住んでいたのも、このフェニキアである。イスラエル人はフェニキア人などを娶ることにより偶像崇拜の罪を犯し、亡国の憂き目となった。しかし、その偶像崇拜の根源は<神々の真相 4>で記したように、元々この地方の主神バアルとして崇められていたエンリルをマルドゥクが乗っ取ったことであり、更に愛するドゥムジ復活の幻想を抱いていたイナンナの“聖なる結婚”の儀式である。マルドゥクが主神となって以後、偶像崇拜と人身供犠が重なったこの地域と民族は主から忌み嫌われ、呪われたのである。後に、イエスによって神殿から追い出された商人の末裔も合わせり、サタン崇拜の偶像崇拜へと発展した。

さて、北イスラエルはサマリアにあり、サマリアはカナンに隣り合って南側にあるから、婚姻や商業活動など、様々な交流があったことは間違いない。そのサマリアの王族だったのがエフライム族である。エフライム族＝海部氏＝尾張氏は海神を祀る海人族であるから、陸路ではなく、海路＝海のシルクロードで渡来したに違いない。それこそが、フェニキアの航海術の利用である。

では、エフライム族もフェニキア人だったのかというとそうではなく、当時の公用語的な言語であるフェニキア語を使い、その文化を良く知っていた、ということである。そもそも、フェニキア語とヘブライ語は極めて類似しており、方言程度の差しか見られない。(以下、Wikipedia 参照。) フェニキア語は北西セム文字を基にして紀元前 1050 年頃生まれた言葉であり、アルファベットの基で、

子音を表現する文字のみから構成される文字体系である。この特徴は、フェニキア文字から生まれたヘブライ文字やアラビア文字にも受け継がれている。ギリシア文字はフェニキア文字の直系の後継であり、更に発展させたのがラテン文字やキリル文字である。これは、交易が盛んなフェニキア商人により、各地に広まったためである。古ヘブライ文字はフェニキア文字とほとんど同一である。数世紀後、イスラエル人はアラム文字を使うようになるが、それはイエスが生きていた頃のイスラエルでもある。アラム文字は現代ヘブライ文字、シリア文字など、多数の関連する音素文字に分かれた。

このようなフェニキア語とフェニキアの航海術に長けたエフライム族が海路で渡来したと考えると、日本の地が“不老不死”と言われるのも理解できる。〈神々の真相 4〉で記したように、フェニキアの語源はフェニックスに由来し、フェニックスは不死鳥フェニックスとイナンナの好物で「生命の樹」の象徴となったナツメヤシのことである。フェニックスの不死鳥伝説は、イナンナの“不死の力”“復活”願望と、イナンナ自身が木に掛けられて“死んで”“復活した”ことが原型である。そして、フェニキアではイナンナがイシュタル、アシュタルテとして崇拝されており、アシュタルテに生贄として捧げられた聖王がフェニキア人と言われていた。聖王の靈魂は鳥と見なされ、靈魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔するとされていたから、フェニックス＝不死鳥伝説が誕生したのである。（これに、更にマルドゥクによるでっち上げが加わった。）

つまり、遺跡に残されたフェニキア文字はフェニキア語とフェニキアの航海術に長けたエフライム族が海路で渡来したことを暗示し、フェニキアの語源たるフェニックスは“不老不死”を象徴しており、それが支那の東の海にある“不老不死の国”とされたのである。そして、聖王＝それなりの身分の人の靈魂が鳥として“復活”することは、日本武尊が死んだ後に白鳥として“復活”した伝承に見事反映されている！日本武尊は熱田神宮、すなわち、尾張氏（海部氏）＝エフライム族と関係が深い。つまり、日本武尊の白鳥伝説は“不老不死”と、それが意味するフェニキア、エフライム族との関係を象徴していたのである！だからこそ、熱田の地が古くから不老不死の国に因んだ“蓬莱”と呼ばれていたのである。

そして、フェニキアとの関係の手掛かりは沖縄にある。考えてみれば、日本武尊の東征時、尾張氏の祖である建稲種命は当時の尾張水軍を率いたし、熱田に縁の源氏の戦法は、義経の鶴越えが目立っているので陸での奇襲戦法のように思われがちであるが、実は壇ノ浦の戦いで見られる水軍他、源氏縁の九鬼水軍、村上水軍など、海人としての性格が極めて強い。つまり、尾張氏も表立ってはいないが海人族であり、沖縄人、海部氏、尾張氏は海人族ということでも見事に一致している。

なお、各地の浦島伝説も“不老不死”が原型の1つだろう。浦島太郎は長寿だが、長寿は一種の不老不死でもあり、不老不死はフェニックスに由来する。ただし、浦島伝説の根源はニビルと地球の関係のように思われる。来訪したアヌよりも、息子のエンキやエンリル、娘のニンフルサグの方が早く老けてしまっていたことから。

エフライム族は自らの意志で渡来したのではなく、やはり「神」によって日本の地に導かれたのであろう。将来のために。その地には、後に海底に沈むことになる神殿群が、「神々」が建造した神殿群が早くから存在したのである。これは、ピラミッドがクフ王の時代にはなく、それよりも遙か以前に建造されており、エジプト人はただ利用したに過ぎないことと同じである。また、マヤなどの中南米の遺跡も同様である。

そして、フェニキアから海のシルクロードを通して来たからには、日本の地にはまず沖縄に到着することになる。だからこそ、ここまで見てきたように、沖縄と物部氏、とりわけ海部氏＝尾張氏＝エフライム族との関係は深い。

年代記には、このような日本のことは出てこない。しかし、イエスの原型の1人となっている太陽神ウツの多くの愛人について触れられていないのと同様に、日本についても意図的に触れられていないと考えられる。

(8) 丹生（にゅう）と不老不死、東大寺のお水取り

①お水取りの真相

(7)では沖縄と不老不死の相関について記したが、本土に於ける不老不死伝説で有名なのが、不老不死の妙薬“丹生”である。この丹生の謎を解く鍵も、籠神社にある。

籠神社で特別公開されていた資料の中には、丹生姫命という聞き慣れない神の名が記されているものがあつた。それに依ると、丹生姫命は天照大神の妹となっている。丹生とは不老不死の妙薬のことだから、天照大神は“復活”する“永遠の命”であり、それを丹生姫命で象徴しているのである。なお、丹生は硫化水銀であることが判明している。過去、多くの権力者が不老不死の妙薬を追い求めたが、水銀中毒で死亡した例も多々見受けられるのは、そのためである。

さて、丹生と言え、東大寺の“お水取り”が最も有名である。東大寺の“お水取り”は若狭の“お水送り”と組みになっているが、お水取りはインドからの渡来僧である実忠和尚が始めたこととされ、その実忠和尚の師は、お水送りを始めた遠敷（おにゅう）出身の良弁和尚である。そして、後に東大寺別当となったのは、秦氏最大の僧、空海である。

お水取りは、正式には“修二会のお香水汲み”と言う。“お香水”は、若狭にある鶴の瀬から10日間かけて奈良東大寺二月堂の若狭井に届くと言われている。“鶴”は“う”と読むので、同じ読みの“烏＝八咫烏”に通じる。若狭にある遠敷川を遡った白石神社で、毎年3月2日にお水送りがある。遠敷川上流の白石神社のお水送りは、神社から更に上流の下根来の山八神事から始まる。赤土（丹生の象徴）を神酒で練り、祈祷する。禰宜が柱に“山八”の字を書く。“山”は「神」や「生命の樹」、 “八”は救世主を象徴するが、“八”を数字で表して横にすれば“∞”となり、“永遠”を象徴する。つまり、“山八”は“救世主たる神”でもあり、“永遠の生命”のことでもある。参列者は順に頭に水を振り掛け、饅頭を食べ、赤土を舐め、神酒を口にする。そして参列者は赤土を半紙に着けて持ち帰り、棒にさして四炷に立てる。四炷はメルカバーである。

夕方、白石神社のある神宮寺で、衣冠束帯姿の僧と神職が手桶のお香水を神火で清める行を行う。護摩火が焚かれ、修験者や観客が何百人も松明を持ち、鶉の瀬まで行列して行き、そこでお香水を遠敷川に流して大和国へお水送りする。このお香水は、若狭の真南に位置する東大寺二月堂の若狭井に湧き出すと言われ、3月13日の修二会にお水取りされる。

(<http://www.ne.jp/asahi/hon/bando-1000/dust/tan/tan-12.htm> 参照。)

修二会では、道明かりとして大きな松明が焚かれる。修二会は、正式には十一面悔過（けか）と言い、十一面観音を本尊とし、天下泰平、五穀豊穰などを願って祈りを捧げ、人々に代わって懺悔する行である。

(<http://www.todaiji.or.jp/index/hoyo/syunie-open.html> 参照。)

十一面観音は、隠されたセフィラであるダウトも含めた「生命の樹」である。それに懺悔するためにお香水が必要となるのであれば、お香水は「生命の樹」に注がれる「生命の水」に他ならない。(シュメールの粘土板には、鷲の姿をした者たちが「生命の樹」に「生命の水」を注いでいる図が残されている。)

つまり、遠敷川は丹生の川、生命の水の象徴であり、若狭は“永遠の若さ”を象徴している。“永遠の若さ”は“福”に他ならないから、“永遠の若さ”を与える生命の水の湧く井戸、ということで“福井”となる。白石神社の白石は<聖書について>で記したように、ベルガモンの教会宛にある“勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者の他、誰も知らない新しい名が書いてある”という白石のことで、神宮のお白石のことでもある。だからこそ、白石神社は神宮寺にある。3月13日の13はイエスと12人の使徒の象徴であり、3月はユダヤ暦の最終月であるアダル月から正月であるニサンの月に相当する。大きな松明は、シュメールで「神々」を空から迎える際、篝火を焚いて迎えたことに由来する。

②徐福と不老不死の関係

では、不老不死を求めて渡来した徐福との関係はどうか？実は、“徐福上陸の土地”という碑が、若狭湾西端の伊根にある。そして、若狭から紀伊半島へと南下すると、“徐福終焉の地”とされる熊野となる。また、お水送りの遠敷とお水取りの東大寺、空海縁の高野山もこの南北ラインに沿っている。つまり、徐福と不老不死の話は、日本国内で見事に繋がっているのである。しかし、東大寺や高野山の建造は徐福ではなく秦氏が行ったから、不老不死を象徴するお水送りとお水取りは徐福ではなく、徐福よりも遙か後に渡来した秦氏が始めたものである。それは、徐福が不老不死の妙薬を求めて渡来したという“史実”に基づき、イエスのカッパーラを駆使して始めたものである。

硫化水銀は支那で不老不死の妙薬とされていたものであり、支那の道教では丹田に気＝生命のエネルギーが宿るとし、それを体内に巡らせることにより、不死の肉体になるという。この丹田に由来して“丹生”であり、徐福は支那のカッパーラ＝道教の使い手だったので、不老不死の妙薬“丹生”は徐福を象徴している。そして、徐福上陸の土地は“丹後”にある。なお、“永遠の若さ”や

“白石”はイエスに由来していることは、前述の通りである。

日本列島には当初、カ・インの子孫が住んでいた。そこに、フェニキアから海のシルクロードを通してエフライム族が渡来して和平を結び、カッパーラによる不老不死伝説ができた。その後、不老不死伝説を聞きつけた徐福一団が始皇帝の命により渡来し、先に渡来していたエフライム族とまとまり、物部氏となったのである。

“不老不死の妙薬”伝説の大元はギルガメッシュが求めた長寿、不老不死であり、ジウストラが長寿の植物を教えたが、結局は手に入れることができなかったことである。(＜神々の真相1＞参照。)始皇帝や徐福が不老不死伝説の真意を知っていたのか、あるいは単に伝説に聞く物質としての妙薬を求めたのかは定かではない。しかし、いずれにしろ徐福は方士＝カッパーラの使い手だったので、渡来して不老不死の真相を知ることとなった。そして、徐福が率いて来た一団は物部氏となり、全国に広がっていった。故に、日本各地で見られる不老不死伝説には徐福が関係している場合が多いのである。

このように、不老不死のカッパーラに徐福が関わっていたとなれば、方士たる徐福もレビ族だったのである。(3)ではエフライム族と共にレビ族も渡来したと記したが、これは神器の1つ、アロンの杖に関わるレビ族である。北イスラエルが持っていたもう1つの神器、マナの壺はガド族が継承し、秦氏と共にフルが持って来て応神天皇となった。ならば、エフライム族とは異なり、海のシルクロードではなく陸のシルクロードを経由して分かれた支族側にも神器がある以上、そちらにもレビ族はいたと考えるのが妥当である。そのレビ族の流れを汲むのが徐福だと考えられる。徐福は始皇帝と同じ嬴姓であり、始皇帝は西域のユダヤ人であるから、海路ではなく、陸路を経由した支族側であろう。

なお、「史記」には“徐福は五穀の種を持って東方に船出し、平原広沢を得て王となり、戻らなかった”との記述がある。徐福上陸の土地“伊根”は“稲”に繋がり、徐福が日本に渡来した時期と日本で稲作が普及し始めた時期は重なるので、徐福が現在の稲作技術をもたらした可能性が高い。

2：忌部氏

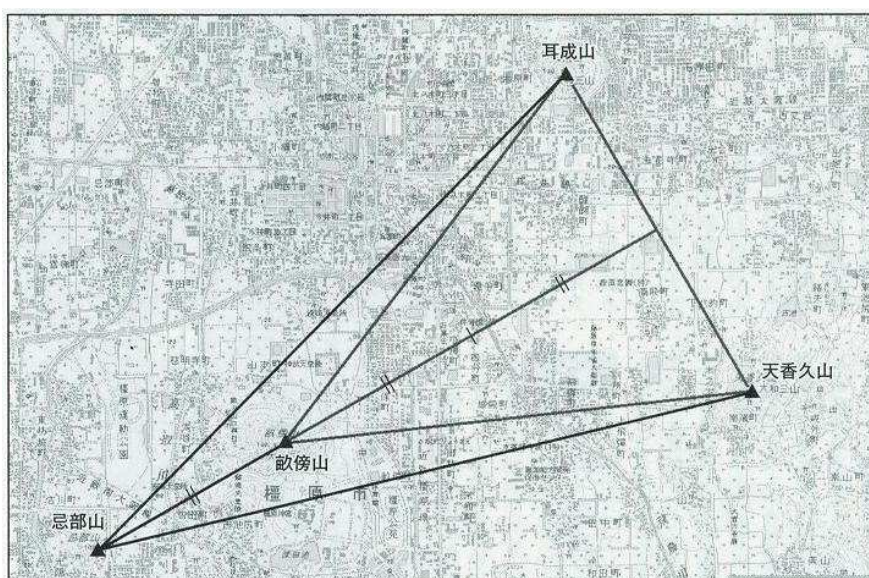
忌部氏は阿波忌部氏が大嘗祭の鹿服(あらたえ)を献上するという重要な役割を果たしていることから、今までの飛鳥氏の著書に依ると、八咫鳥は忌部氏の子孫であり、忌部氏の中の忌部氏が賀茂氏ということである。つまり、忌部氏は秦氏の中の秦氏ということである。確かにそれは正しいであろうが、1：で見たように、忌部氏を御神事を執り行うレビ族と見なすと、北イスラエルの失われた十支族側にもレビ族はいたはずであり、それは物部系のレビ族である。その謎を解く鍵が、冒頭の有賀訓氏の著である。

(1)忌部氏と方墳

一般的に古墳と言えば、前方後円墳が有名である。しかし、前方後円墳は一時的な流行であり、その前後の時代は四角い方墳が圧倒的である。その方墳の

多くが三段のジグザット型で、代表的なのは奈良の柘山古墳（崇神天皇の皇子、倭彦命の墓とされている）である。ジグザットはシュメールやエジプト、中南米などのピラミッドとの関係を伺わせる。また、柘山古墳の北西約 800 メートルの地点に、人工的な山を思わせる忌部山がある。“忌部山”の名称は忌部氏との関係を伺わせるが、この忌部山は大和三山と極めて興味深い配置にある。

<神々の真相 2>で記したように、大和三山は人工の山である。その中の耳成山はエジプトのピラミッドを原型とした春日神社を結ぶことにより奈良盆地に浮かび上がる巨人像の頭部に相当するが、畝傍山を頂点と見ると、畝傍山－天香具山、畝傍山－耳成山の長さがほぼ等しく、二等辺三角形を形成する。そして、頂点の畝傍山から底辺（耳成山－天香具山）へ垂線（垂直二等分線）を引いて延長すると、西側が忌部山、東側が三輪山に突き当たる。（ここでは、三輪山は図示されていない。）特に、忌部山と畝傍山の距離は、この垂直二等分線の正確に 1/3 である。

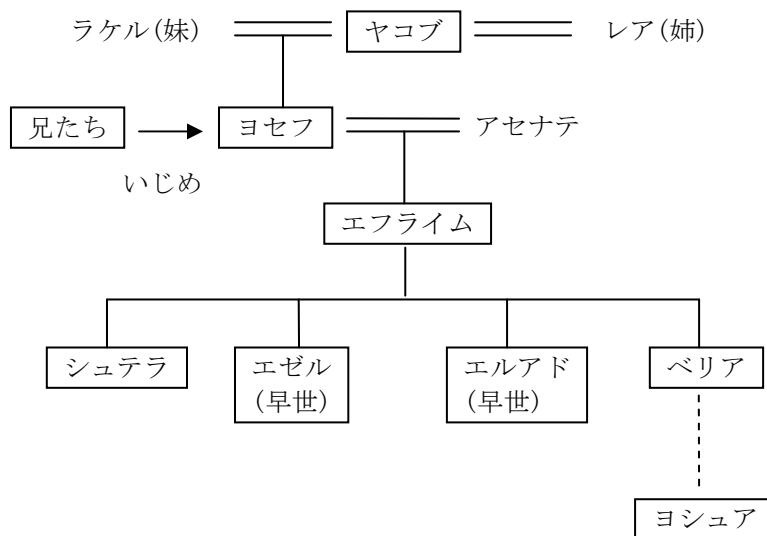


三輪山には大物主神が祀られており（大神神社）、この神の息子が神武天皇であり、大物主神＝火雷神＝ウガエフキアエズノミコトは、ユダヤの系図ではエフライムに相当した。大神神社は最古の神社とも言われ、本殿は無く、三輪山を御神体とし、鳥居も 2 本の柱に縄を掛けた古代エルサレムの神殿と同じ様式である。そして、籠神社の海部宮司の極秘伝からすれば、物部氏の王族＝エフライム族が元々いたのは近畿地方だったので、最古とも言われる大神神社はエフライム族の神殿だったのである！それが、大物主神とユダヤの系図との関係で象徴されているのであり、これも海部氏＝尾張氏がエフライム族であるという重要な証拠である。

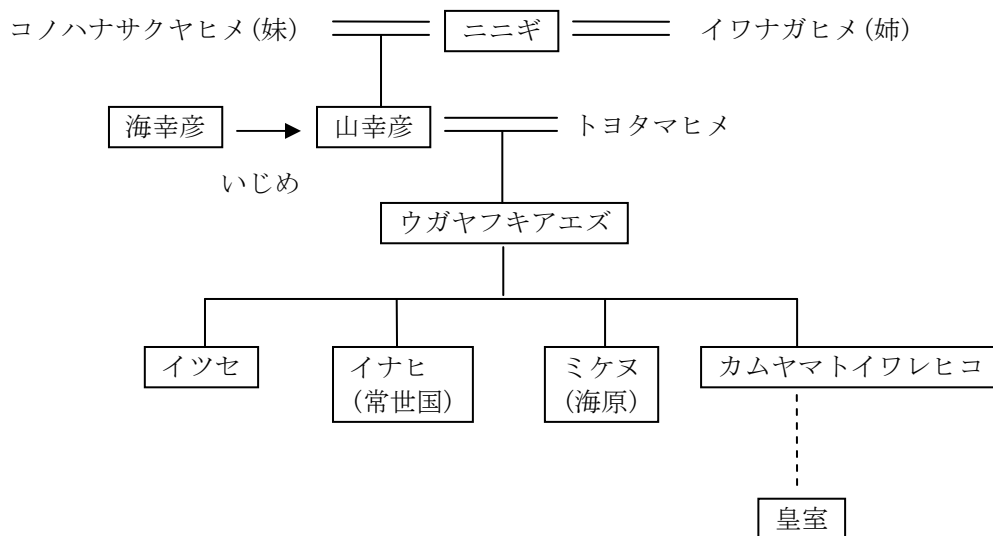
何よりも、籠神社の奥宮の名称、与謝（よさの）宮がそれを端的に裏付けている。これは“ヨシュアの宮”という意味であるが、ヨシュアはモーゼ亡き後、その後を引き継いでヘブライの民を約束の地カナンへ導いたエフライム族出身の指導者である。（預言者とは呼ばれていないが、主の言葉を取り次いだ預言者

的存在である。)つまり、最終的な“約束の地”日本へ最初に到着したエフライム族＝海部氏(＝尾張氏)が、後に渡来した他の失われた十支族、すなわち徐福一団と共に物部王国＝ユダヤ王国を築いたことは、象徴的にはヨシュアの物語と同義である。それ故、海部氏の最重要神殿である奥宮を“ヨシュアの宮＝与謝宮”とすることにより、海部氏＝尾張氏がエフライム族であることを象徴しているのである。

聖書



日本神話



さて、もう一方の山で今回の話題の中心たる忌部山であるが、この線を更に延長すると四国の阿波があり、阿波忌部氏がこの忌部山に関わることが暗示されている。四国と近畿の地名は一致しているものが多く、行き来があったことを示唆する。

忌部山は三段の階段式ピラミッド＝ジグラットであり、ジグラットはシュメールでは神が降臨する場所である。忌部＝イムベの“イム”をそのまま漢字にすると「仏」となる。仏は蓮華に坐すから、陰（蓮）陽（仏）の合一を象徴するのと同時に、“復活（蓮）”する神（仏）の予型でもある。そして、現在の日本の墓は「仏式」で、方墳を受け継いだ三段の石の上に石の柱が乗っている。三段は「生命の樹」の三界に相当し、柱は神である。つまり、墓石は「生命の樹」に神が降臨することを象徴している。また“忌＝蛇の御心”で、この上なく清浄、という意味であるが、普通は死に関わる意味である。だから、死に関わる墓の根本は、忌部氏の三段式ジグラット＝方墳と言える。

古事記には、阿波忌部氏は天皇の命令で関東に行き、一大王国を築いたとある。「新説・歴史ミステリー」では、関東に大きな古代文明があったこと、そこでは青銅器が発掘されていること、三種の神器に相当する鏡、剣、勾玉が出土していることが紹介されていた。秦氏は鉄器、青銅器は物部氏だから、この王国は物部氏の王国ということになる。この王国は利根川流域にあり、その河口には香取神宮と鹿島神宮がある。両神宮は<神々の真相 2>で記したように、香取はマナの壺で籠神社＝海部氏、鹿島は剣で象徴される熱田神宮＝尾張氏に関係する。ならば、物部氏の象徴として鹿島と香取を配置し、そこに物部氏の中の忌部氏である阿波忌部氏が行って祭祀を執り行ったと考えられる。香取、鹿島は春日大社の原型でエジプトに関係し、春日神社を結ぶと奈良盆地に巨大なオリオン像が出現した。そして、忌部山と大和三山の関係は前述のように象徴的であり、忌部氏がエジプト、とりわけ“神の山ピラミッド”に関係することを象徴しているとも見なせる。そのピラミッドの大元は、シュメールの階段状ピラミッド、ジグラットであり、日本では方墳となっている。

著者は、“忌部＝忌＋部”で“指導者層の「忌」とその配下たる「部民」とし、“忌”は実は“イム”であり、エジプトの宰相イム・ホテップに因むと類推している。イム・ホテップは初の石造ピラミッドであるジュセル王墓を設計・建設したと伝えられている。この場合の“ホテップ”とは神々と王族の尊称で、宰相イムが賢神として崇められた結果として与えられた名称である、としている。そして、エジプトのピラミッドがメソポタミアで発達したマスタバ墳墓をベースに発展したものという事情を考慮すると、イム・ホテップとは必ずしも固有名詞ではなく、焼成煉瓦あるいは石材ブロックの方形ユニットを階段状に積み上げる、マスタバ墳墓の建造技術者を総称していた、と著者は類推している。つまり、“忌＝イム”は方墳の建造技術者と解釈している。

確かに、このように解釈すれば、神事に携わることのできるレビ族＝忌部氏が方墳の建造を指導したことは納得できるものである。

これまで、秦氏が土木事業や工芸などに秀でた技術集団としていた。この場合の秦氏とは、応神天皇渡来後、朝鮮半島経由で渡来した一団のことであり、必ずしも失われていない二氏族（ユダ、ベニヤミン）のことだけではない。応神天皇は失われた十支族の中のガド族であり、応神天皇渡来後、朝鮮半島経由で渡来した一団の秦氏は、原始キリスト教に改宗した失われた十支族系のユダヤ人が多数を占め、彼らを物部氏と見なすならば、土木事業や工芸の大部分は純粋な秦氏（失われていない二氏族）ではなく、物部氏が担っていたということになる。だから、全国的に分布していた物部氏を阿波忌部氏が指導することにより、古代王国を建設することができるのである。

なお、抵抗していた物部氏＝ユダヤ教徒も後にすべて改宗して原始キリスト教徒になったから、表向きはすべて秦氏になったと言える。

(2) 籠神社の極秘伝

① 忌部氏

このように見てくると、阿波忌部氏は北イスラエル王国＝失われた十支族系のレビ族であると考えるのが妥当である。籠神社の海部宮司に依ると、四国が重要であるという。言われた時には、単に大嘗祭の籠服を献上する阿波忌部氏と、剣山でノアの箱舟がアララト山に到着した日に行われる祭り（7月17日の神輿渡御）の重要性を指しているのかと思った。しかし、物部氏のトップが重要と言うからには、四国の阿波で象徴される阿波忌部氏のことであり、阿波忌部氏も物部氏に属するということである。

阿波忌部氏は大嘗祭に於いて籠服という白装束を献上する。大嘗祭では皇太子殿下の“最後の晚餐”“死”、そして天皇陛下となって“復活”することを再現しており、イエス・キリストの御魂と一体となり、正式に王権を継承する御神事である。だから、この籠服は“死に装束”である。そして、このような御神事に関われるのはレビ族のみである。ただし、中核を成す、失われていない二氏族系＝原始キリスト教徒（純粋秦氏）のレビ族が御神事を取り仕切るが、これは賀茂氏である。対して、失われた十支族系＝ユダヤ教徒（物部氏）のレビ族は取り仕切らずに関わるのみである。これが阿波忌部氏であり、阿波忌部氏は物部系故に、直接御神事を取り仕切るのではなく、籠服を献上するのみとなったのであろう。そういう意味で、忌部氏を“レビ族”と言い換えると、神道を裏から取り仕切る秦氏系のレビ族が賀茂氏＝八咫鳥、物部系のレビ族が忌部氏と言える。中でも、エフライム族＝海部氏＝尾張氏と共に渡来したレビ族が阿波忌部氏である。

また、イエスの磔刑を見守ったのが原始キリスト教徒＝秦氏のレビ族である。イエスを十字架に掛けるよう要求したのは原始キリスト教徒ではないユダヤ人＝ユダヤ教徒である。籠服という“死に装束”を差し出すことは、死を要求していることと同じである。つまり、イエスの“死”と“復活”を象徴する大嘗祭に於いて、“死に装束”である籠服を献上する阿波忌部氏はユダヤ教徒の象徴であり、物部氏はユダヤ教徒だから、阿波忌部氏は物部氏ということになる。

著者は、古代メソポタミアに於いて、天界へ旅立つ死者を導くイム・ドクトという鳥獣神を挙げ、“忌”の読みと掛け、メソポタミアとの関連性を指摘し、今後の研究課題としている。この鳥獣は、フェニックスに他ならない。方墳に関係する阿波忌部氏の忌=イミ=イムには、フェニックスという意味も込められているのである！確かに、フェニックスは死者の“復活”に関わり、大嘗祭で僮服を献上する忌部氏に最も相応しく、また、死者に関わることができるレビ族たる忌部氏に相応しい。

そして、フェニックスは沖縄に関わりが深く、沖縄は古代物部氏、とりわけフェニックス=フェニキアと関係が深いエフライム族=海部氏=尾張氏と繋がる。このことから阿波忌部氏は物部氏であり、特にエフライム族、アロンの杖と共に渡来した物部氏（レビ族）と言える。“エフライム”にも“イム”が含まれていることは、それを暗示している。

②大山祇（おおやまつみ）神社

A：籠神社との関係

海部宮司に依ると、四国の大山祇神社も重要であるという。大山祇神社は愛媛にあり、大山祇神を祀る。“祇”は“地の神”という意味であり、大山祇神は“大いなる山の神”という意味である。別名は和多志大神であるが、“ワタ”は籠神社の祭神、海神ワタツミノカミの“ワタ”と同じで海の名詞であり、海神ということである。つまり、山と海の両方を司る神である。

籠神社の表向きの祭神は彦火明命で、多次元同時存在の法則から彦火明命=火遠理命=山幸彦である。山幸彦は海神ワタツミノカミの娘、トヨタマヒメと結婚した。つまり、山の神と海の神が1つになっており、大山祇神と同じ構造である。（2人の間に生まれたのがナギサタケウガヤフキアエズノミコトであり、その子の内の1人が初代天皇、神武天皇となった。）

大山祇神はイザナギとイザナミとの間に生まれ、野の神である鹿屋野比売神（カヤノヒメノカミ）との間に次の四対八神の神を産んでいる。

- ・天之狭土神、国之狭土神。
- ・天之狭霧神、国之狭霧神。
- ・天之闇戸神、国之闇戸神。
- ・大戸惑子神、大戸惑女神。

最初の二柱のうち、国之狭土神は日本書紀に記載されている原初の三柱の内の一柱と同じ読みである。

- ・国常立尊→国狭槌尊（クニノサヅチノミコト）→豊狭槌尊。

尊=神であり、読みが同一で同じ文字の“国狭”を用いている以上、（狭い意味での）多次元同時存在の法則から両神は同一である。（広い意味ではすべて同一。）古事記では高御産巢日神に相当し、「生命の樹」では慈悲の柱に相当する。

つまり、古事記に於いて天之御中主神が高御産巢日神の父神に相当すると見なすと、大山祇神は国之狭土神の父神だから、天之御中主神に相当することが解る。籠神社の裏の極秘伝に依れば、籠神社の本来の主神は天之御中主神であるから、ここでも籠神社の祭神の構造と同じである。つまり、祭神の別名と子の名称から、大山祇神社は籠神社の別形態と見なして良く、物部氏の最重要拠点の1つということである。だから、愛媛の大山祇神社は重要なのである。

大山祇神社は愛媛県今治市大三島町にあり、確かに伊予国一の宮で、重要であることを示唆している。そして、全国の三島神社・大祇神社の総本社でもある。また、日子火々出見命（ヒコホホデミノミコト）の坐像があるが、ヒコホホデミノミコトは籠神社の祭神ホノヒアカリノミコトと同じである。そして、境内社として稲荷神社と宇迦神社があり、お稲荷さん＝ウカノミタマ＝豊受大神だから、これも籠神社と一致する。

なお、天孫ニニギは大山祇神の娘であるコノハナノサクヤヒメと結婚した。ニニギは秦氏、大山祇神は物部氏の象徴であるから、これは実質の初代天皇、秦氏の大王たる応神天皇が物部王朝に婿入りしたことを象徴している。

B：スサノオとの関係

スサノオの妻であるクシナダヒメの父母、アシナヅチノミコト、テナヅチノミコトは大山祇神の子である。スサノオとクシナダヒメとの子ヤシマジヌミは大山祇神の娘のコノハナチルヒメと結婚し、フハノモヂクヌスヌを産んでいるが、その子孫が大国主である。

また、大山祇神の娘であるカムオホイチヒメとスサノオの間に大歳神とウカノミタマが生まれている。ウカノミタマ＝豊受大神である。

このように、大山祇神はスサノオと非常に関係が深い。つまり、1：(4)でも記した通り、スサノオの系統は物部氏の系統を象徴しているのである。スサノオは秦氏が持ってきた天照大神に反逆したが、後に従った。これは、渡来した秦氏に抵抗していた尾張氏＝海部氏が最終的には従ったことを象徴している。

スサノオの最たる象徴は、八岐大蛇の尾から取り出した天叢雲剣＝草薙神剣＝アロンの杖であり、物部氏最高の宝である。スサノオは天叢雲剣を和解の印として天照大神に献上したが、これはユダヤの三種の神器のうちの1つを秦氏に献上したことに他ならない。現在は、“その時”が来るまで、本来の持ち主である尾張氏の神殿、熱田神宮に安置されている。

スサノオが関係する神社で有名なのは八坂神社である。読みは“弥栄”でもあり、“永劫の繁栄”を表すが、“ヤーサカ”でもある。“ヤー”はヤハウエで物部氏の主神である。そして、大山祇神社の祖霊社（神宮寺）の横には八坂神社がある。

C：一人角力（ひとりずもう）

毎年春の御田植祭（旧暦5月5日）の御田植神事の前と、秋の抜穂祭（旧暦9月9日）の抜穂神事の後に、御浅敷殿と神饌田の間に設けられた土俵で行われ

る相撲神事である。稲の精霊と一力山（力士名＝四股名）による 3 本勝負で行われ、稲の精霊が 2 勝 1 敗で勝つ。稲の精霊が勝つことにより、春には豊作が約束され、秋には収穫を感謝するという神事である。

ここでは「一人相撲」ではなく「一人角力」と書くが、広義の力比べである「角力」の文字を用いて、一般の相撲とは違うこと、神との力比べであることを表す。これは、次の旧約の一節（創世記 32 章），“ペヌエルでの格闘”が原型である。

“ヤコブは独り後に残った。その時、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節が外れた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福して下さるまでは離しません」「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」と言った。

「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、私の名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。”

この話は、「イスラエル」の語源となっている極めて重要な内容である。それ故、旧約の神を崇める物部系の神社、とりわけトップの海部氏と関係が深い大山祇神社で行われるのである。

ここでヤコブと闘い、祝福したのは神の遣いである天使とされている。それは、神を直接見ると死ぬと言われており、ヤコブは直接顔を見たのにも関わらず、生きていたからである。一般的に天使は目に見えないので、稲の精霊はこの天使に相当し、力士はヤコブである。御神事では力士は負けることになっているが、それはあくまでも表向きの話で、裏はこのようなことなのである。（なお、相撲の原型はアヌとアラルの格闘であることは<神々の真相 1>参照。）

「一力山」という四股名は藤原百千氏の命名によるが、“百千”という名前は“多くの”という意味である。そして、“一力”とは“一人の力”という意味で、一人で相撲を取るためであるが、“万”の字を「一」と「力」に分けたもの”という意味もある。そうすると、“百千”と続けて“百千万＝未来永劫、永遠”となる。

また、「角力」は“ツノのチカラ”であるが、ヘブライ語で“ツノ”は“カーラン”と言い、ラテン語では“コルン（コルヌ）”となる。この“カーラン”には他に“光”という意味もあるが、聖書が様々な言語に訳される際に、誤訳を生じた。ギリシャ語経由の訳書ならば“光”として訳されているが、直接ラテン語に訳されたものの中には“角”と誤訳されたものもある。（ウルガタ訳など。）有名なミケランジェロはモーゼの像を作製しているが、それには角が生えている。これは、モーゼの顔が光り輝いていたことを、モーゼの顔に角が生えてい

たと勘違いしたためである。この場合の「角力」も実は「光の力」であり、“神の力”という意味になる。なお、イスラム教の“コーラン”も、ヘブライ語の“カーラン=光”が語源であることは、想像に難くない。コーランの「光の章」(35節～46節)には、“神は天と地の光なり”とあり、神は光とされている。

D：阿波忌部氏との関係

“大山祇”を文字通り解釈すると、大きな山を積む、ということで、石を積んで大きな山となるピラミッドやジグザットのことであり、阿波忌部氏を象徴している。つまり、阿波忌部氏は籠神社と表裏一体を成す大山祇神社とも繋がりがああり、ここからも阿波忌部氏はエフライム族と共に渡来した物部氏のレビ族と言える。

E：伊勢の内宮との関係

伊勢神宮内宮の境内には、何故か、大山祇神社と子安神社がある。子安神社はコノハナサクヤヒメを祀り、縁結び、子授け、安産、子育ての御利益があるとされるが、大山祇神社の祭神はコノハナサクヤヒメの父神、という程度しか紹介されていない。

しかし、内宮の境内にわざわざ御鎮座しているということは、大変重要であることを示唆する。それは、ここまでに述べてきたような理由のためである。何よりもA：で記したように、秦氏の象徴である天孫ニニギは物部氏の象徴である大山祇神の娘、コノハナサクヤヒメと結婚し、これは実質の初代天皇、秦氏の大王たる応神天皇が物部王朝に婿入りしたことを象徴している。

伊勢神宮は秦氏の最重要神社である。そこに物部氏、とりわけトップの海部氏の象徴たる大山祇神と娘のコノハナサクヤヒメを祀ることにより、物部氏と秦氏の関係を象徴し、謎を解く鍵としているのである。何よりも、外宮から内宮に続く参道には、菊の御紋と共に籠神社の裏社紋である六芒星が刻まれた灯籠が並んでいることは、象徴的である。

3：＜日本の真相＞との違い

＜日本の真相＞では飛鳥氏の一連の著書をまとめ、次のように記載した。

- ・八咫鳥の中のトップ3人が大鳥であり、大鳥で裏天皇たる金鵄を形成する。
- ・弓月君なる人物は存在せず、“秦氏を表す象徴”である。これは、弓月王国に由来するものである。京都・太秦、広隆寺の側にある大酒神社では、秦氏の首長として、秦酒公、秦の始皇帝と共に弓月君が祀られている。ここでは“ゆんずのきみ”と読ませており、弓月王国に由来していることが解る。しかし、秦の始皇帝とは関係無い。カモフラージュである。

まず、大鳥についてである。最新の著書では、70人近くいる八咫鳥の中の12人が大鳥であり、その中の3人が金鵄であるとしている。3人の大鳥が金鵄を形

成するという事は変わっていないが、どちらが真実なのだろうか。

また、今回の一連の結果から、物部氏と秦の始皇帝は深い関わりがあることが判明した。例えば、漢字のカッパーは秦氏の創作とされているが、漢字の字体を統一した始皇帝の時代にイエスはいないので、この場合の秦氏とは原始キリスト教徒のことではなく、支那の西域にいたユダヤ教徒のことである。つまり、物部氏ということである。始皇帝もペルシャ系ユダヤ人ならば、それはユダヤ教徒、すなわち、物部氏に他ならない。だから、徐福の一団＝物部氏の中には、始皇帝の血縁もいたことは想像に難くない。そして、支那の「義楚六帖」には“徐福の子孫は秦氏を名乗っている”とある。徐福は秦の始皇帝と同族であるから、その子孫が“秦”を名乗ることは自然の成り行きであり、また、徐福が率いてきた一団は物部氏であるが、後に原始キリスト教に改宗して秦氏となったのである。

4：かごめ歌

飛鳥氏は今回、籠神社の海部宮司から、かごめ歌の秘密の一部を明かされた。本来、かごめ歌は籠神社の隠し歌で、日本の国家成立に関わる重大な秘密が暗号として隠されているという。その極秘伝が記された紙には、かごめ歌に登場する鶴は伊雑宮であり、亀は籠神社のことであると記されていたという。

飛鳥氏は、心御柱が最初に到着した地点が籠神社であり“阿”、伊雑宮が最後の到着地点であり“吽”で、両者で“阿吽”を成すことから、鶴は伊雑宮の伝承に登場する真鶴、亀は籠神社の伝承に登場する倭宿彌命の乗っている亀と推理し、“後ろの正面”とは伊勢神宮の内宮と外宮から見てそれぞれ後ろの正面、すなわち、伊雑宮と籠神社を示すと類推している。

更に、かごめ歌の最大の焦点として“鳥”を挙げている。鳥は陰陽道の中では天と地を繋ぐもので、八咫鳥も鳥であり、彼らを象徴する天狗にも翼が描かれている。聖書では天狗は天使に相当する。よって、鳥を天使、ヘブライ語でケルビムと言い換えると、翼を広げた一対のケルビムが玉座を形成する契約の箱アークとなる。現在は激動の世で真っ暗闇であり、物部氏の正体が明らかとなった今、光り輝く朝を迎える夜明けの晩に伊勢神宮から契約の箱アークが現れる、その日は遠くない、としている。

しかし、飛鳥氏は肝心な“後ろの正面”の解釈を間違えており、“鳥”としての象徴も間違えている。そこで再度、かごめ歌について記す。かごめ歌の解釈は<日本の真相>で示した。

<かごめ歌>

かごめ かごめ

籠の中の鳥は いついつ出やる

夜明けの晩に 鶴と亀がすべった

後ろの正面 だあれ

“かごめ＝籠目”とは、竹で編んだ籠にできる隙間で、六角形で六芒星の象徴である。六芒星はユダヤ教の象徴で、物部氏を象徴している。籠目紋は古代史の謎を紐解く籠神社と伊雑宮の御紋でもあり、ここでも物部氏を象徴している。(伊雑宮の場所は、物部氏の領地だった。)

“鳥”は精霊で、秦氏の象徴である。籠は物部氏の象徴だから、“籠の中の鳥”とは、物部氏が秦氏を取り囲む形、すなわち、十支族が二支族を取り囲む構造となる。これは、物部系の源氏の象徴たる白が、秦氏系の平家の象徴たる赤を取り囲んでいる日の丸＝日本の象徴である。

そうすると、“籠の中の鳥は いついつ出やる”とは、日本の真実はいつ公開されるのか、ということになる。鳥は秦氏であり、秦氏が守り抜いてきた日本の秘密はイエスの奥義であるから、イエスの奥義・御神体がいつ公開されるのか、ということである。

“夜明け”とは、太陽が現れる＝光の神イエスが再臨する＝世界に真実が公開される、ということであるから、“夜明けの晩”とは、イエスが再臨する前、世界に真実が公開される前、ということである。

“鶴と亀がすべった”の鶴は鳥で秦氏＝失われていない二支族、亀は六芒星で物部氏＝失われた十支族の象徴である。特に、鶴は伊雑宮の由来に登場する、稲穂をくわえながら鳴いている真鶴に通じる。そして、“すべる”は“滑る”ではなく“統べる”である。つまり、秦氏と物部氏が 1 つになる＝日本で真実が公開されるということである。

“後ろの正面 だあれ”とは、後ろ向きの人が正面を向くと誰なのか、ということである。“後ろ”と言え、カッパーラでは後ろ向きのアダム・カドモンの象徴であり、「神」は顔を見せなかったのが後ろ向きである。そして、アダム・カドモンは「生命の樹」と「神」の象徴である。それが正面を向くとは、実際に「神」が降りてきて姿を見せることに他ならない。この場合のアダム・カドモンは、人間に関わる唯一絶対神イエスである。

以上のことから、かごめ歌は次のように解釈される。

“奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。世界に公開される前に、まず日本で事実が公開され、日本が真に 1 つとなる。その後、世界にも公開される。その時、天照大神＝イエスが降臨し、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

<日本の真相>ではこのように解釈したが、ここで更に補足する。“鳥”は秦氏の象徴であるが、秦氏が最も重要視しているのは心御柱であるから、“鳥”は心御柱の象徴でもある。これは、古事記で示唆されている。古事記に於ける日本の国造りは、イザナギとイザナミが天御柱＝心御柱の周りを回って行った。つまり、現在の日本の根幹は、心御柱を中心にして秦氏によって行われたということである。

“日本の真実”とはユダヤ教とイエスの奥義・御神体であり、三種の神器と心御柱であるが、これらが公開されても、信じられない人は多いだろう。特に、心御柱は柱に過ぎず、何故、そのようなものが日本にあるのか？ヨーロッパに

は多くの聖十字架教会があつて、本物の十字架はそちらにあり、日本のものこそ偽物であると主張されたら、神宮の心御柱こそ本物の聖十字架である、という物的証拠が必要となる。それこそが、天照大神の名が記されている“心御柱の首”、すなわち、聖十字架の罪状板に他ならない。それが封印されている場所こそが、真鶴で象徴され、裏社紋が籠神社と同じ籠目紋の伊雑宮である。その真鶴は日本で最も重要な作物である稲穂をくわえているから、稲穂こそ最も重要な罪状板の象徴に他ならず、籠目紋の宮に封印されているのである。これが、“籠の中の鳥”の真意である。

<日本の真相>では、かごめ歌の解釈に先駆け、エゼキエル書にある次の重要預言を解釈した。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。”

1つの木と成すのは「私」であり、「私」はイエスである。ならば、ここでいう「ユダ」は「イエス」のことではない。そして、“ユダの木”とはユダヤの王たるイエスが掛けられた聖十字架、つまり心御柱のことであり、秦氏＝失われていない二支族の象徴でもある。“エフライムの手にあるヨセフの木＝エフライムの木”とはエフライム族を王族とした失われた十支族＝物部氏の象徴で王権の象徴たるアロンの杖のことであり、これを保有しているのはエフライム族の王族たる尾張氏で、草薙神剣のことである。

八咫鳥に依ると、草薙神剣が伊勢神宮に戻され、伊雑宮の心御柱となった時、すべての準備が整った印となり、天照大神が降臨するという。ならば、“ユダの木”とは心御柱の中でも最も重要な天照大神の名が記されている“首”＝罪状板であり、それが封印されているのは伊雑宮だから、伊雑宮の心御柱となる草薙神剣が“エフライムの木”となる。エゼキエル書の預言は、このことを象徴している。

そうすると、“鶴と亀がすべる”ことは秦氏と物部氏が1つになる＝日本で真実が公開されるということであるが、より正確に言うならば、草薙神剣（物部氏が保有する最高の御神宝）が伊雑宮（罪状板は秦氏が保有する最大にして最高の御神宝）に戻されて心御柱となることである。<日本の真相>では、何度もこの預言を提示してきたので、半ば当たり前のように理解できるはずとされていたが、詳しく述べるとこのような意味なのである。

結局、かごめ歌の真意は<日本の真相>と同じであるが、より端的には次のようになる。

“奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。その最たるものは、天照大神＝イエスの名が記された罪状板であり、聖十字架並びにユダヤの三種の神器がすべて日本に存在し、それを守り抜いてきたのが日本という国である。

そして、物部氏（＝失われた十支族）の御神宝である草薙神劍が秦氏（失われていない二氏族）の最大にして最高の御神宝が封印されている伊勢宮の心御柱となって三種の神器がすべて伊勢神宮に揃った時、それが印となり、天照大神が降臨する。その時、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

要は、八咫鳥が預言している天照大神の御降臨が、かごめ歌として象徴されているのである。そして、この解釈は籠神社の解釈とも矛盾しない。では、何故、かごめ歌が籠神社の隠し歌なのか？もう言うまでも無いだろうが、この国に於いて、秦氏の（人類にとっても）最高にして最大の御神宝たる心御柱＝聖十字架が日本で最初に到着した地が、物部氏の王族たる海部氏＝尾張氏の籠神社だからである。そして、心御柱は天照大神に関わる御神宝なので天の象徴、籠神社は（その文字が示す通り）籠目紋＝六芒星で人間＝地の象徴となるから、心御柱が籠神社に到着したことで、天と地を結ぶ架け橋ができたことになる。それにより、籠神社の側にある巨大な砂州を天橋立と見立てる神話が創られたのである。これはまた、物部氏＝失われた十支族と秦氏＝失われていない二支族の統合、つまり、“神の僕”たるイスラエルの支族の再統合に他ならない。

よって、“籠の中の鳥”とは、籠神社に到着した心御柱のことも象徴している。その後、心御柱並びに八咫鏡と勾玉で象徴される御神器は伊勢神宮に、草薙神劍で象徴される御神器は熱田神宮に移され、現在の日本の根幹が形成された。（御神器的には、“その時”が来るまで物部氏と秦氏が別れたことになる。）故に、かごめ歌は国家成立の重大な秘密に関わった籠神社の隠し歌と成り得る。言い換えれば、籠神社が封印している日本国家成立の秘密、ということである。

天照大神の御降臨時期に関しては<神々の真相 5>で詳細に推定したが、平成25年＝2013年は神宮式年遷宮、熱田神宮創祀1900年祭、出雲大社御遷座が行われる最重要の年であり、他にも多くの神社がこの年に向けて大改修などを進めている。そして、世界を裏から支配している三百人委員会の世界統一共産化政府樹立予定は2012年であり、「神」の真相への導き者ニンギシュジツダの作成したマヤ暦は2012年の冬至で1つの時代の区切りとなっている。

こうして物部氏の真相が明らかになった以上、“その時”は目前に迫っているのである。

参考著書：

- ・学研ムー、2009年7月号、10月号、12月号。
- ・小学館、小林よしのり著、「沖繩論」

初版：2009年12月

改定3版：2012年7月

改定4版：2012年12月